

2024年度 教育研究助成 実践事例選

公益財団法人 東京海上日動教育振興基金

(<http://www.tmn-kyoiku-sinko-f.org>)

ご 挨拶

当財団は、次代を担う青少年の育成に携わる教職員の方々が行う各種の実践的教育研究に対する助成を通し、いささかでも教育の振興に資することを指すとともに、不幸にして交通遺児となり経済的困難に直面している児童生徒に対し教育費の一部を援助することにより育英の一助とすべく、1984年8月に設立されました（2009年10月「公益財団法人」へ移行）。

爾来、多くの関係者よりご支援をいただき、更には東京海上日動火災保険株式会社が経営理念の一つとして掲げている「良き企業市民として、地球環境保護、人権尊重、コンプライアンス、社会貢献等の社会的責任を果たし、広く地域・社会の発展に貢献する」との理念とも相俟って、教育振興事業を積極的に進めてまいりました。創業以来の助成件数は、教育研究助成7,457作品、交通遺児育英助成4,710名となっております。

我が国を巡る状況は、社会経済のグローバル化やデジタル化、急速に進む少子高齢化等により大きく変わってきております。その中にあるのは、次代を担う子どもたち一人一人が、初等中等教育課程においてしっかりとした基本基礎を培い、新しい時代に求められる生きる資質や能力を身につけることが何にもまして重要であります。そして、これを担う教職員各位の役割はきわめて大きく、子どもたちが学習意欲を高め、自ら考え発信し行動する力や心豊かに逞しく生きる力を育む教育の実践に一層のご尽力が期待されるところであります。

当財団では、毎年、学校教育において意欲的に取り組み、創意工夫を凝らした指導によって顕著な成果を収めている実践研究に対し助成を行っておりますが、2024年度の助成作品の中から、それぞれの地域・学び手に即して優れた取組が認められる作品5編について当冊子に取り纏め刊行いたしました。この冊子が、いささかなりとも皆様方のお役に立つことが出来れば、誠に幸いに存じます。

最後になりますが、刊行に当たりご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2025年4月

公益財団法人 東京海上日動教育振興基金

理事長 大塚 竜二

目 次

【学校研究の部】

- 地域の中で子どもたちを育む学校づくり …………… 1
～コミュニティ・スクール導入から2年間で何ができたか?～
千葉県立下総高等学校 校長 長野 泰紀

- 多層的な学校経営を意識して …………… 13
～当たり前の取組の積み重ねで安心できる学校に～
神奈川県相模原市立宮上小学校 校長 宮原 幸雄

- 平成7年豪雨災害の記憶をつなぐ防災教育 …………… 29
～2年間の保小中合同避難訓練を通して～
長野県小谷村立小谷中学校 校長 小林 かおる

【団体研究の部】

- 生徒が主役の三者懇談会のススメ …………… 41
～学修インタビューの取組～
神戸教育研究所 長谷川 伸

【個人研究の部】

- 夜間定時制工業高校における探究活動とものづくりの実践 …… 57
～生徒の自己肯定感育成と学校広報～
岡山県倉敷市立工業高等学校 教諭 佐藤 慎太郎

研究題目

地域の中で子どもたちを育む学校づくり
～コミュニティ・スクール導入から2年間で何ができたか?～

目 次

- 1 コミュニティ・スクール導入によって目指すもの
- 2 私にとっての地域連携との出会い
- 3 「ものづくり 人づくり 夢づくり」
- 4 コミュニティ・スクールの導入準備
- 5 コミュニティ・スクール運営の実際
- 6 コミュニティ・スクール導入でできたこと～2年間の実践の成果
 - (1) 学校の広報誌を作ってくれた
 - (2) 委員に生徒の指導をお願い
 - (3) 地域連携の取組～地元義務教育学校・特別支援学校との連携～
 - (4) 地域連携の取組～地域企業との連携～
 - (5) 地域連携の取組～印旛沼漁協との連携～
 - (6) 地域連携の取組～成田空港との連携～
 - (7) 国際教育～大学との連携～
- 7 今後の課題
- 8 地域との連携で育まれるもの

千葉県立下総高等学校 校長 長野 泰紀

1 コミュニティ・スクール導入によって目指すもの

本校は成田市にある、園芸科(農業)・自動車科(工業)・情報処理科(商業)の3つの学科を持つ専門高校である。西暦1900年に地元の方々の努力で設立された小御門農学校がそのはじまりである。専門教育により、長く農業をはじめ、地域産業を支える人材を輩出してきた。成田市の北東部、旧香取郡下総町に位置するため、香取市方面から通ってくる生徒も多い。また、千葉市や柏市、船橋市など遠方から通ってくる生徒もいる。十数年前から定員を欠くことが多くなって、ここ数年は志願者の減少が顕著である。地域の中で生徒を育む取組を進め、学校の魅力を増し、地域に欠かせない学校づくりを行うために、令和4年度からコミュニティ・スクールの制度を導入した。地域の中で生徒が活動することで、生徒の非認知能力が高まり、より良い人生を歩む糧を得てほしい、との願いである。

2 私にとっての地域連携との出会い

私にとって、本校は初任校であり、自分を教員として育ててくれた学校なので、愛着もある。当時から農業高校として地域とのかかわりの深い学校だった。しかし、私が地域連携の大切さについて印象づけられたのは、2校目の富里高校だった。そこにはジャズオーケストラ部という物珍しい部活動があって、演奏会は地域に根づいていた。イベントがあれば呼ばれて演奏して、生徒たちは声をかけられる。演奏会では、舞台近くに出てきてジャズのリズムに合わせて踊っているお客さんまでいた。生徒は地域の方に声を掛けられて、自信を持つ。地域の方も元気になってくれる、ということを感じた。外部指導者の篠原正樹さんの指導のもと、生徒たちの演奏力はぐんぐん向上し、世界三大ジャズフェスティバルの一つである、モントレージャズフェスティバルにもお招きいただいた。地元紙には一面記事に、「音楽は言葉の壁を乗り越える」のタイトルとともに楽器を吹く生徒の写真が大きく載った。

その後、教頭になった多古高校は、コミュニティ・スクールとして全国でも先進校だった。各地から先生方や教育委員会職員の方々が視察に来てくれた。地域になくってはならない高校、地域に愛されている高校でもあった。委員や、役場の職員、地域の方々が毎朝代わる代わるに校門の前に立って、登校してくる生徒たちに挨拶をしてくれる。生徒も心が耕される。生徒もお祭りや小中学校に出かけて行って活動している。

学校の先生の力以外に、生徒を伸ばしてくれるものがそこにはあった。地域の方々も「高校生に元気をもらった」と言ってくれる。

私はその後、他校の管理職を経て、令和3年度に初任校である下総高校の校長に赴任した。

3 「ものづくり 人づくり 夢づくり」

「ものづくり 人づくり 夢づくり」が本校のスクールモットーである。

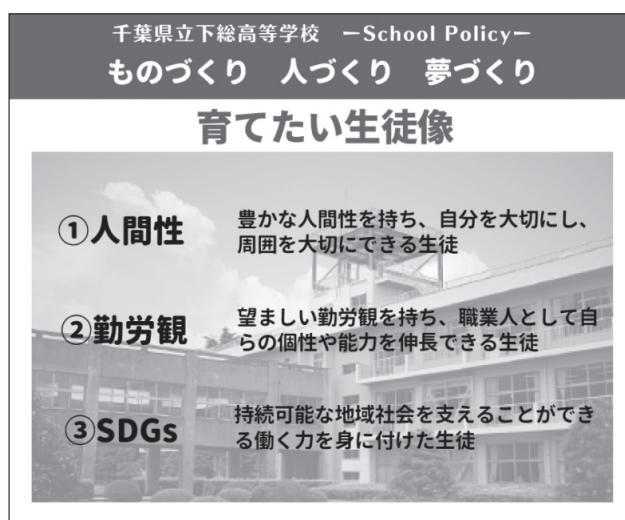
「働く力を身につけた持続可能な地域社会を支える職業人の育成」を学校教育目標の中で掲げている。(図1)

授業の半分近くを専門学科が占めているが、専門学科の学習は、高校で0からのスタートとなる内容がほとんどなので、素直に、真剣に取り組んで、思いのほか力を伸ばす生徒も少なくない。資格取得も奨励している。一人で20の資格を取得した生徒がいて驚いた。3学科あるので、

例えば園芸科の生徒が工業関係の資格を取るなど、学科を超えた資格取得も多い。

本校は文科省指定の農業経営者育成高校でもあり、園芸科1年生は敷地内にある寮で一定期間共同生活を行うことで、多くのことを学んでいる。

学習面にしても、生活面にしても、職員は実に丁寧に生徒のことを見ている。困難を抱えた生徒も少なくないが、一人の職員が抱えず、チームで対応することを基本にしている。農業クラブでは、関東大会や全国大会に進んだ生徒が出た。自動車部は令和5年度にエコカーレース*1で、コロナで大会中止の前からの通算で全国優勝7連覇となった。



【図1】

4 コミュニティ・スクールの導入準備

本校に赴任した令和3年度の秋、私は運営委員会で、本校へのコミュニティ・スクールの導入を投げかけた。もともとが農業高校である。園芸科では地域連携を普段からやっている。先生方には、「コミュニティ・スクールの制度を導入して学校全体で地域連携をさらに推進し、生徒が地域の中で育まれる学校にしたい、生徒の自己有用感を伸ばしたい。本校を地域に欠かせない学校にしたい。本校生徒が外に出ることで、地域がもっと元気になることも期待したい。先生方の負担はなるべく抑えたい。」そんなことを話した。特段の反対意見もなく、導入の方向が決まった。

千葉県でコミュニティ・スクールを主管するのは教育振興部生涯学習課の学校・家庭・地域連携室である。そこには知人がいたので、電話すると不在だったが、室長が代わりに出てくれて、本校に来て説明してくれると言う。お言葉に甘えて来校してもうらうと、「難しいことはない。調査があるので、その時にいついつから始めたい、と答えてくれればいい」とのことだった。

11月にあった調査には、翌令和4年度からの導入の希望を出し、4月からコミュニティ・スクールとなることが決まった。以前教頭で勤めた多古高校は、確か導入まで研究期間を3年ほど設けていたはずだ。スタートまで4カ月、これは忙しいぞ、と気がついた。

教頭先生が定年を迎え、変わることがわかっていたので、書類提出以外の準備は私がやることにした。

まず、委員の人選である。開かれた学校づくり委員会の委員の方々には、これまでの感謝とともに新しい制度を導入することを告げ、コミュニティ・スクールの委員はゼロベースで考えることとした。高校の場合、地域の行政、近隣の小中学校、学識経験者、地域住民、保護者、地域の企業といったところから選ぶのが定石である。

コロナによる様々な制限がある頃で、委員の依頼は、電話によるお願いが中心となった。行政は市役所の総務関係か、教育委員会かで迷ったが、成田市教育委員会にお願いすることとした。成田市も市をあげてコミュニティ・スクール導入を検討していた時期だったこともあって、市の教育長と、生涯学習課の副参事に委員に就任していただくことになった。また、隣地にある小中一貫校、成田市立下総みどり学園の校長にも委員になってもらった。

委員の方々に学校の宣伝を手伝ってもらいたい、という下心があったのだが、ぴったりの方がいた。同窓会幹事長さんが印刷業なのだ。ただの幹事長ではない。「下総高校愛」の塊の方である。行動力もある。この方には直接会って委員就任のお願いをした。また、別の同窓会役員の方は、地元の直売所しもふさの理事だったので、こちらにもお願いした。学識経験者には、以前教頭で勤めた四街道北高校で外部講師をお願いしたご縁で、千葉敬愛短期大学(現敬愛短期大学)の佐久間敦子先生に電話して、快諾を得た。

P T Aからは当時の会長さんが「いいですよ」と言ってくれた。園芸科があるので、かとり農業協同組合へ相談に言った。蓋を開けてみたら、組合長が委員を引き受けてくれた。地元農業法人代表の方にも委員に加わってもらった。自動車科関連としては、同じ成田市にある日本自動車大学校に相談した。理事長・校長先生が引き受けてくれた。

情報処理科は商業の学科であり、地元経営者団体として成田市商工会議所に、電話でアポイントメントをとって、直接話しに行った。下総・大栄地区の、成田東商工会にもお願いにいった。それぞれ、会頭と、会計理事の方に委員をお引き受けいただいた。

地元企業としては、成田国際空港株式会社(N A A)にお願いしたいと思い、同社地域共生部に依頼の電話をしたが、コロナ対応に大変に敏感な時期で、担当者にお会いするのも困難だった。数度の電話、メールでのやり取りの末、地域共生部のマネージャーに委員をお引き受けいただいた。

直売所しもふさ理事の方に、成田市の市議会議員を紹介してもらい、委員になっていただいた。このようにして、3月中に私を含めて15名の委員が決まった。学校の味方になってくれそうな方、行動力のある方々がそろった。コミュニティ・スクールの委員選びは、制度がうまく動くかどうかを左右する最重要事項といえる。人選には慎重を期

すことが肝要である。学校評議員であれば、意見を言ってくれればそれでいい。コミュニティ・スクールの委員には、意見を言ってくれた上で、学校がより良い方向に行くように自ら動いてくれる人になってほしい。

委員への依頼とともに、並行して学校の各学科の会議でコミュニティ・スクールの制度でやってもらいたいことを出してもらって、一覧を作成した。どうせやるなら、生徒のための活動を増やすとともに、教員の負担を少しでも軽減したい。委員に絡んでもらいやすい行事の一覧も作成した。第一回の会議資料の一部とした。

全体の会議は年3回を予定した。年4回が標準的だが、委員になるみなさんは忙しい方ばかりである。また、15人全員で会議で話すのもいいが、さらに熟議を深めたいと思ひ、3つの分科会を設けることとした。学校教育活動推進分科会、広報推進分科会、地域連携推進分科会である。

教職員のうち、各分掌の長と教頭、事務長を校内委員として、それぞれ分科会にも振り分けた。

5 コミュニティ・スクール運営の実際

年度が明け、4月になって委員の推薦書と、会議予定を県に提出した。バタバタだったが、4月終わりの第一回学校運営協議会の会議を迎えた。第一回の会議では学校運営方針の承認をしてもらうとともに、正副会長、コーディネーターの選出を行う。会長には千葉敬愛短期大学の佐久間先生に就任してもらった。元公立高校校長であり、学校の事情をよくわかってくださっている方である。議長として全体会もうまくリードしてくださる。副会長には直売所しもふさの理事の方が選出された。地域コーディネーターには、農業法人代表の方が選ばれた。

各分科会では今年度どんなことができるか、話し合ってもらった。まずはできるところからやっていくわけだ。委員である市の教育長の紹介で、地元ショッピングモールでイベントをやらせてもらうことにした。また、学校の広報誌として、「小御門かわら版」を作ってもらうこととした。まずは無理せず年1回の発行として、中学校訪問の際に「先生方や生徒さんに渡してください」、と持って行ったり、市役所や公民館、駅などに設置してもらったりした。

また、委員に学校に来てもらい、生徒の様子を見てもらう日程も決めた。

6 コミュニティ・スクール導入でできたこと～2年間の実践の成果

(1) 学校の広報誌を作ってくれた

広報分科会では、編集のために全体の会議以外にも委員が集まって何度か小委員会を開いてくれた。中心となる委員の同窓会幹事長の方は、さすが印刷屋さんだけあって、広報誌の作成の流れはすべてわかっている。この方が主導して、紙面構成が決まり、コミュニティ・スクールのキャラクターまでできた。本校濫觴の地、小御門神社の神をイメージしたキャラクター「こみかど君」である。私の知らない間に、委員が生徒に依頼していつの間にか完成していた、というのが実際である。なかなかいいデザインなので、私の名刺にも使わせてもらっている。広報誌作成に関して教職員がやったのは、生徒への原稿依頼の連絡くらいだった。8月中には立派な広報誌ができて、中学校訪問の際に持って行き、中学生に配ってもらうことができた。(図2)



【図2】

(2) 委員に生徒の指導をお願い

令和5年度には進路指導部からの要望で、進路面接の面接官役を委員の方をお願いすることになった。8月の2日間、午前か午後、委員の方の都合のいいところで、面接官として生徒の指導をしてもらった。生徒たちは、教員相手に面接の練習を重ねるが、やはり本番は緊張するものである。上級学校の職員や企業の経営者、団体の役員の方々に面接官をやってもらおうと、生徒たちも本気度を増して練習する。その甲斐あって、昨年度の3年生は就職者も進学者も、全員進路を決めて卒業することができた。

専門学科なので、各学科とも課題研究の授業がある。その集大成として課題研究発表会がある。各学科それぞれで発表会を行い、その代表者たちによる全校課題研究発表会を行った。そこにも都合のつく委員に参加してもらった。参観していただくのはもちろん、講評もお願いした。委員の方々には発表をほめていただき、生徒たちも誇らし気だった。校長がほめるより、ずっといい。

(3) 地域連携の取組～地元義務教育学校・特別支援学校との連携～

本校はもともとが農業高校である。地域のお祭りへの参加や、小学校との交流は

ずっと以前からやってきた。委員からの紹介や働きかけで、地域連携の取組は、コミュニティ・スクール導入前から比べてずっと増えた。令和5年度、地域連携の取組は50を数えたが、そのうち半数はコミュニティ・スクール導入後の取組である。

下総みどり学園の校長先生から、「中学生段階の生徒のプログラミング学習でお手伝い願えないか」との相談をいただいた。こちらからお願いしたいくらいである。さっそく担当教員どうして話してもらって、秋に下総みどり学園の7年生(中学1年生)に本校に来校してもらい、プログラミングの授業を受けてもらった。(図3)授業は情報処理科の教諭が行うが、情報処理科の生徒がお兄さん、お姉さんとして補助役となった。今まで、助けてもらうことが多かった本校生徒が助ける側に回ることができた。「誰かの役に立っている」そんな気持ちで生徒たちはいそいそと立ち回ってくれた。本当にありがたいことだった。あわせて、私は心の中で「みんな、良かったらうちに入学してね」、と思っていたのは事実である。



【図3】

昨年度からは、下総みどり学園の5・6年生の希望児童を対象に、ロボット工作教室を本校で開いている。障害物を乗り越える、リモートコントロールのレスキューロボットカーの作成である。キットではなく、基盤から何からすべて市販の部品で作る。本校自動車科の生徒が、手取り足取り一緒に作業をしてくれる。児童にとっては、頼りになるお兄さんお姉さんである。これまた自動車科の生徒の自己有用感が高まっていく。

なお、園芸科では、以前からの取組として、下総みどり学園の生活科「まちたんけん」で2年生の児童に本校に来校してもらい、野菜苗を購入してもらっている。3・4年生の児童には、春はサツマイモの苗の植え付け、秋には収穫をしてもらう。本校園芸科の生徒が説明や作業の補助をしてくれる。生徒たちも、わかりやすいように紙芝居を作ったり、話し方に工夫をしたりする。対話力、表現力も高まるというものである。

また、香取特別支援学校の生徒さんに来てもらって、野菜の収穫体験をしてもらったり、食品製造棟でパン作りを体験してもらったりした。本校生徒も作業の補助にあたった。お互い中学校で同じクラスだったという生徒どうしが再会する、という楽しい場面もあった。農業はインテグレーションと親和性がある。農業クラブの意見発表で「農福連携」(障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組)をテーマに発表していた生徒がいたことを思い出した。

(4) 地域連携の取組～地域企業との連携～

令和4年度、地元ショッピングモールの広場をお借りして、3学科合同イベントを開催した。園芸科によるなし販売・ヒンメリーづくり、情報処理科によるPCを使ったうちのデザインとうちわづくり、自動車科ではライトレースカー体験を行った。(図4)もちろん、広報推進分科会で作ってもらった広報誌を渡し学校での宣伝も行う。人通りも多く、地元ケーブルテレビもきてくれて、宣伝効果は大きかったと思う。ショッピングモールを運営するこの企業は教育CSRにも熱心で、ありがたい。



【図4】

本校では3学科合同プロジェクトとして、以前から、地元の滑河駅前の花壇整備・イルミネーション装飾をおこなっている。園芸科草花専攻の生徒たちが普段から、駅前の花壇を整備し、駅を使う人々の目を楽しませている。また、自動車科の生徒が冬になるとイルミネーションの装飾を行う。装飾装置は毎年バージョンアップされる。装置の電源はソーラーパネルでSDGsにもかなう。センサーによる自動点灯である。駅前が夜になると寂しい様子だったが、イルミネーションが点灯すると、華やかになる。電車の窓からも見える。

毎年、イルミネーションの電源をひっそり入れてきたが、令和4年度からは、成田駅の駅長に参加していただき、イルミネーションの点灯式を行った。ホームページへの掲載は、情報処理科生徒が行ってくれた。違う学科の生徒が協力して地域のために一つのことを行う、ということも面白い。

また、地元のFMラジオ局ラジオ成田さんにも、たびたび生徒や職員が出演させていただいている。生徒たちも自分たちがやっている取組の話なので、自信をもって堂々と話している。たいしたものである。ラジオ成田主催で、成田地区の公立高校5校の生徒が、ショッピングモールを会場に自校の魅力をアピールする機会もいただいた。

(5) 地域連携の取組～印旛沼漁協との連携～

園芸科では、これまでも減農薬、無農薬、有機農法についての研究を進めてきた。齊藤一彦教諭は、まだ若いながらも研究熱心で、「地域で困っているもので地域を活性化できないか」と考えてきた。そこで生徒たちに利根川で繁殖している特定外来魚アメリカ



【図5】

ナマズ(チャネルキャットフィッシュ)の液肥への活用を提案し、生徒に研究を進めさせた。利根川の漁業権を管理する印旛沼漁協の協力で、生徒たちに特定外来魚について勉強させ、指導のもと実際に駆除活動を行った。短い時間で、数十匹の釣果という入れ食い状態に、生徒たちも驚いた様子だったという。駆除したアメリカナマズを煮出して、その栄養分を餌に光合成細菌を培養し、液肥をつかってレタスやメロンの栽培に使用した。(図5)レタスの葉は大きく、みずみずしく育ち、メロンも香り高く熟した。できたメロンはチャネルキャットフィッシュにちなんで「CCFメロン」と命名してブランド化を図った。販売会などで販売し、毎回完売するなど好評である。領家隆史教頭(現成田西陵高校長)や荒木田光生農場長のバックアップも大きかった。特定外来魚のアメリカナマズを使った液肥づくりは、SDGsにかなう取組であり、国際的に肥料価格が高騰する中、地域で困っているもので、地域に役に立つものをつくった、ということで生徒も自信を高めている。機会あるごとに成果を発表しているので、物怖じしない。自分たちでやっていることなので、どんな質問にも自分なりの考えを答える。

(6) 地域連携の取組～成田空港との連携～

ある日、委員の一人であるNAAの方から、一本のメールをいただいた。「空港の第3滑走路建設に伴って、大量の伐採木が出る。この伐採木やチップを地元を提供しているが、学校で使わないか」という話だった。さっそく、荒木田農場長に話を持っていくと、見に行ってくるとのことで、とんとん拍子に伐採木とチップの提供を受けることになった。

いただいたチップは、齊藤教諭が中心となって、野菜の栽培で黒マルチシートの代わりに被覆材として使用している。黒マルチシートと違って、ゴミがでない。環境保全にもかなっている。さらに、チップを燻蒸、光合成細菌と混ぜてたい肥化を図っている。

チップを使用して育てた野菜を、成田空港の社員食堂へ提供することになった。

「下総高校DAY」と銘打って、生徒たちがお邪魔して「パワーサラダ」などを提供し、好評のうちにすぐ完売となった。今年も行われたが、今後毎年恒例の行事としてほしい。(図6)

いただいた伐採木は製材機で製材し、校内で使う看板を製作したり、コースターなどをつくったり、と活用が広がっている。先日農場を歩



【図6】

いていたら、園芸科生徒と自動車科生徒が協力して、駅前のイルミネーションの部材づくりをしていた。

成田空港との連携の取組は、一つの取組が次の取組へとつながっており、地域連携のあり方としては理想的だと思う。NAAの方々には大変感謝している。

また、これらの取組をまとめて県の「魅力ある県立学校づくり大賞」に応募したところ、特別賞を受賞できたことも、生徒たちの自信と職員の達成感につながったことと思う。

(7) 国際教育～大学との連携～

令和4年のある朝、新聞を見ていたら、ウクライナからの避難者の方が敬愛大学職員となって、大学や高校等で講演会を行っている、との記事があった。「本校でもやってくれないか」と、敬愛大学に問い合わせをすると、「検討してみる」とのことだった。本校学校運営協議会会長である千葉敬愛短期大学の佐久間先生と、以前からお世話になっている敬愛大学アドミッションセンターの主幹にもお話した。「本来は高大連携協定を結んでいるところだけなのですが」と最終的にOKがももらえたのは、お二人の口添えがあったからだと思っている。

9月に敬愛大学からパンコーヴァ・オルガ先生をお招きして、本校で国際講話を行うことができた。ロシアによる軍事侵攻によりウクライナから日本に避難したこと、ウクライナという国についてお話をしていただき、生徒たちも真剣に話を聞き、熱心に質問もしていた。オルガ先生は「本校の生徒たちは、どの学校の生徒より熱心に聞いてくれた」とほめてくださった。生徒達は、大切なことを学び、考えてくれたことと思う。「大切なことを学んだという意識は、子どもたちの学習能力を伸ばす」ということを、かつてジェーン・エリオット博士*²は語っている。

7 今後の課題

本校のコミュニティ・スクールの取組は、「走りながら整えてます」といった感じだが、委員の方々が学校の応援団として、本校の地域連携を前進する力になっていることは間違いない。また、地域連携の取組は令和5年度に50を数え、コミュニティ・スクール導入前のほぼ倍増となった。その分生徒の自己有用感や他と協働する力など、いわゆる非認知能力が伸びていると思う。なお、歴代の教頭先生がうまく調整してくれるおかげで、風通しの良い職場になっていると思う。職員のストレスチェックの数値^{*3}は75(100が標準、低いほど良い)と良好である。

地域学校共同本部の活動を、推進していくことが今後の課題である。保護者・地域の方々等の協力も得て、職員の負担を減らしながら、地域の中で生徒を育てる取組をさらに進めていきたい。

現在は、防災活動に地域の方々、保護者の方々のお力を借りられないか、と考えている。避難訓練は年に2回行っているが、大きな災害が起きた場合は、学校の中で避難して終わりではない。学校に地域の方々が避難してくることもある。

8 地域との連携で育まれるもの

「地域の中で生徒が育つ」「生徒が活躍し、地域が元気になる」これが地域連携の効用であり、コミュニティ・スクールの目指すところであると思う。教職員以外の力で、生徒の非認知能力が伸びていく。自己有用感を持つことは、自信につながり、他者への信頼にもつながる。職員の努力の積み重ねもあるが、進路決定率も上がった。^{*4} 令和5年度は卒業生が全員進路を決めて卒業した。非認知能力の向上は、数値にはなかなか表せないが、生徒のこれからの長い人生にいい影響をもたらしてくれるはずである。

私はすでに役職定年を迎え、今は特例任用で校長でいるが、今年度末は定年退職である。教職員にも異動がある。私はただ去るのみだが、委員の方々、地域の方々、保護者のみなさまには「地域の中で生徒を育て、生徒たちが外に出て地域を元気にする」という、そんな学校づくりのお力添えを、引き続きいただきけると確信している。

<脚注>

- * 1 Honda エコマイレージチャレンジ全国大会 会場はモビリティ・リゾートもてぎ(栃木県)
- * 2 “Class was Divided” ABCテレビドキュメンタリ番組内での発言要旨 1985年3月
- * 3 株式会社ドクタートラスト 総合健康リスクの数値 全国平均は100
- * 4 卒業生の進路決定率 令和3年度末：94.2%、令和4年度末：98.9%、令和5年度末：100%

研究題目

多層的な学校経営を意識して ～当たり前の取組の積み重ねで安心できる学校に～

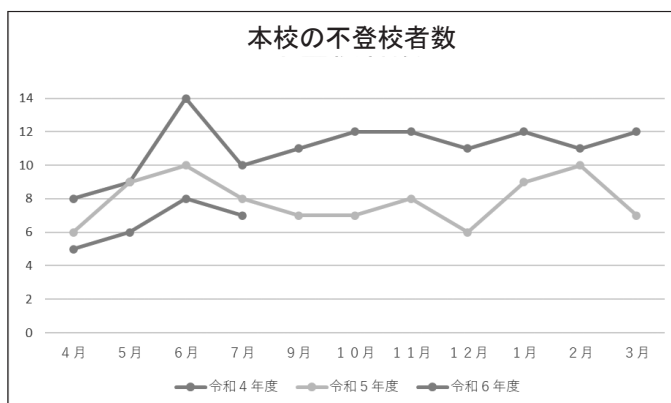
目 次

- 1 はじめに
- 2 チーム学校とは
- 3 学校運営基本方針に基づいた3つのグループの取組
- 4 安心・安全な学校づくりに向けて
- 5 保護者・地域の教育力を活用して
- 6 特別活動を柱にした子どもの自己肯定感の醸成
- 7 見え始めた取組の成果
- 8 今後に向けて

神奈川県相模原市立宮上小学校 校長 宮原 幸雄

1. はじめに

ここ数年、全国的に不登校者数が増加の一途をたどっているのは周知の事実である。本校も例外ではなく、不登校者数は増えてきていたが、ここ2年間は減少傾向にある。その大きな要因となっているのが、「安心できる学校」を目指した数々の取組であると考えられる。



本来、子どもにとって学校は楽しいものであるべきで、多くの人と関わりながら、各々の力を高めていける場所であるはずなのに、そこに様々な不安要素が生じることで躓きを生み、学校から足が遠ざかる結果を招いているのではないか。それならば、その不安要素を解消すれば、子どもたちの足は学校に向きやすくなるはずである。

一方で、子どもたちにまつわる様々な取組を効果あるものとして機能させるには、学校が組織として成熟していく必要がある。言い換えれば、機能する教職員集団を作り上げ、いかにしていかわゆる「チーム学校」と呼べる組織になっていくかが重要であろう。まずは学校を機能する組織に高めていくことが先決であると考え、改めて現在の組織の状況を見つめ直してみた。

2. チーム学校とは

組織には様々な形態があると思うが、かつてよく見られた「トップダウン型」の指示・命令による組織は姿を消し、現在はそれぞれの教職員が自分の役割を果たすボトムアップ型組織に変わってきている。具体的には、決められた校務分掌に基づき、企画・立案、実施、反省、そして企画・立案していくというPDCAサイクルの形を基本にして取り組まれている。このPDCAサイクルを機能させることで、それぞれの担当者は、毎年、各々の力量をバージョンアップさせていくことができる。しかし、本校ではそれが上手く機能していなかった。というのも、各担当が直接校長に聞きに来て、そこで決定を求めてしまい、組織として練り上げていくPDCAは回っていなかったのである。それは「なべ蓋型伺い構造」とも言えいいだろうか。本来は、各担当が思案したものを原案として主任等に諮り、グループで議論をし、そこで出した結論を持って管理職のところに来るのが組織としての理想形だと思う。しかし、本校の実態は担当が思案をする前に直接、管理職に「どうしましょうか。」と聞きに来る姿が散見されていたのである。つまり、管理職の考えに合わせ、担当がそのまま提案することになってしまう。本来、それぞれの教職員の持ち味や経験は学校の財産であり、それを生かさないのはもったいない。

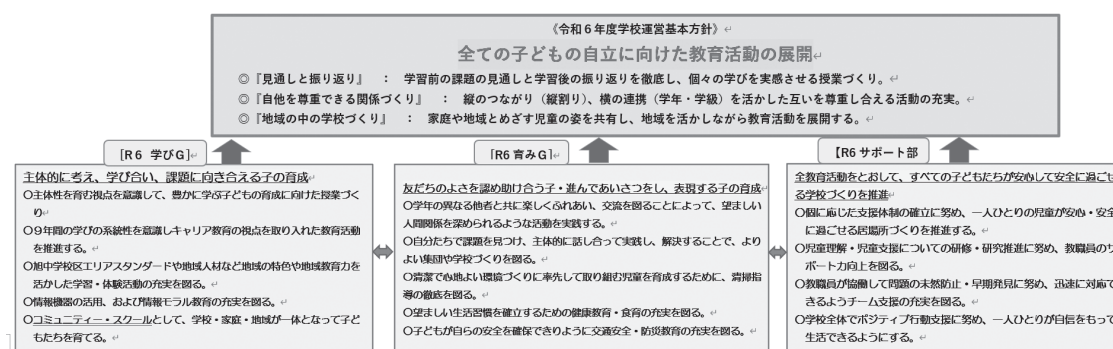
そこで、私が初めに取り組んだことは、「なべ蓋型伺い構造」からの脱却であった。

案件を持って校長室に聞きに来た教員に対して「あなたはどう思いますか。このことを主任や総括は知っていますか。」と問い返した。本来提案とは、自分の案として確固としたものを持っていなければ、そこには目標は見えてこない。また、せつかくの提案もグループで共有していなければ、組織としての成長も望めないからだ。そこで、「どうしましょうか。」という校長への丸投げに対しては、ひたすら「どうしますか。」と問い返した。そうすることで、「こうしたいのですが、どうでしょうか。」という自分の案をグループで議論し、様々な視点が加わって練り上げられていく組織作りを進めていった。これを根気よく繰り返していくうちに、グループを統括する総括教諭の存在が大きくなった。教務主任が中心になって総括教諭を束ね、総括教諭が各グループを束ね、グループ内の各担当は自分の考えを前面に出して提案していく。徐々にではあるが、そんな環境が出来上がってきた。

組織作りはまだまだ道半ばではあるが、校長が大きなベクトルを示し、あとは副校長の監督のもと、教務主任を中心に総括教諭がグループをリードしていく。そのような自走できる組織を目指して意識化を図ってきた。このように、機能する教職員集団作りを目指して取り組んできたことで、徐々にではあるが効果を見せ始めている。

3. 学校運営基本方針に基づいた3つのグループの取組

日々、学校では様々な出来事が起こるが、その内容に応じて、次の3つのグループのうちのいずれかが、問題の解決に向けて動き出している。例えば、学習に関する内容であれば「学びグループ」が、児童指導案件であれば「サポート部」が、というふうにして、担当したグループが対応方針を組んで全体に指示を出す。さらに、内容が児童指導であれば、これに支援教育コーディネーターと児童指導主任が加わり、迅速に対応している。ほとんどの案件は教務主任までの対応で解決しており、副校長や校長が直接対応しなければならない状態にはならない。前年度当初と比べて、組織としての機能が格段に成長をしていると感じる。



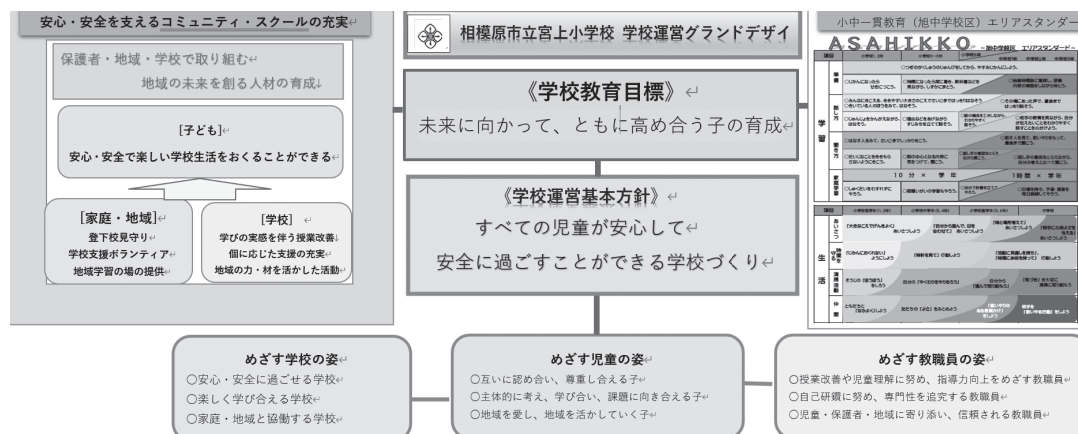
(R6学校グランドデザインから一部抜粋)

4. 安心・安全な学校づくりに向けて

機能する学校組織づくりを進める上で、次は「どこに向かって何を推進していくか」

というビジョンを明確にする必要があった。本校の課題は何なのか、課題改善に向けて取り組むべきことは何なのかというベクトルを、全ての教職員が同じにして進んでいくためには、柱となる明確なキーワードが必要であった。本校においては、それが「安心・安全な学校づくり」であった。

安心・安全な学校とは具体的にどんな学校であろうか。改めて、学校環境を人的・物的の両面で見直してみることにした。



(R6学校グランドデザインから一部抜粋)

(1) 信頼される教職員として

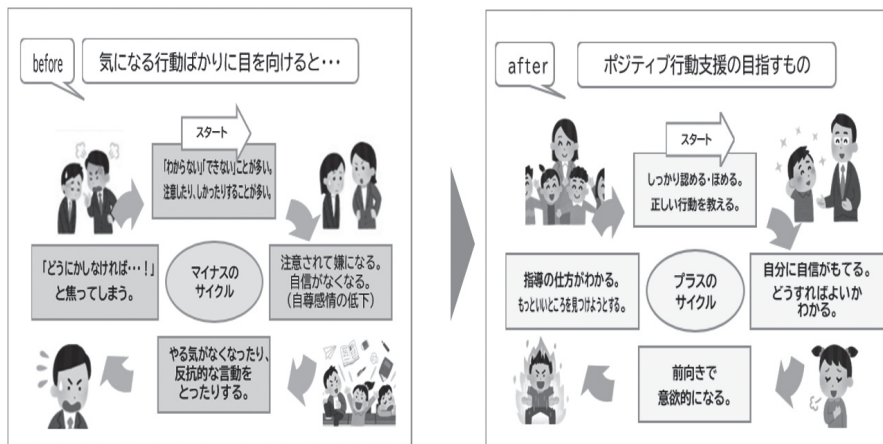
安心・安全な学校になるためには、信頼される教職員集団であることが不可欠である。児童の思いに寄り添い、後押ししてくれる「信頼される教職員」であるために、次のような要素が必要であると考えます。

①学ぶ意欲を高められる確かな授業力

その1つとして、子ども一人ひとりが「できた、分かった」を実感できる授業が展開できることである。子どもが学びの見通しを持つことができるように、授業の冒頭には主体的に取り組みやすい課題を設定し、学習の終わりには、「何が分かったか、何ができたか」を振り返ることを意識づけた。そして、分からなかったことは、子ども自らが次の課題として取り組もうと思えるような授業を目指している。なお、授業研究日以外の日常でも、本校は教員同士が自由に授業を参観し合い、気楽にアドバイスし合える環境ができています。

②ポジティブ行動支援の取組

令和5年度及び6年度の2年間、「ポジティブ行動支援」というキーワードを据えた取組を進めている。ポジティブ行動支援とは、「肯定的・教育的・予防的な方法による支援」のことであるが、例えば、登校渋り傾向にある子どもへの先手の支援として、特別感を演出する「教員との日記のやりとり」「教員からの個別の言葉かけ」「がんばりシール」等の小さな取り組みを重ねている。また、ネガティブ思考の子どもには、教員や保護者と不安な気持ちを共有しながら、受けた言葉をポジティブな言葉に言い換えて、子どもの思考をプラスのサイクルに持ち込むという取



※校内研修資料(相模原市青少年相談センター)

り組みも行っている。そのサイクルが定着することで、子どもが常にポジティブ思考でいられるようになることを期待している。

次に示すのは、長期休暇明け前に各家庭に配信した「ワンポイントアドバイス『おすそ分け通信』」で紹介した例である。ここでは、子どもをポジティブ思考にするための保護者からの言葉かけの例を示したものである。



(R6 校内サポート部作成保護者向け資料「おすそ分け通信第2号」より抜粋)

③安心感を生む教員の言葉かけ

次は、教員が直接、子どもに働きかける「安心感を生む言葉かけ」である。これは、どこの学校でも既に行っていることであるが、行事前や休み明け直前などのタイミングや、どんな言葉かけをするかという言葉の選択は意外に難しいものがある。そして、何より子どもに伝えようとする気持ちが大切である。この方法は、電話や家庭訪問といった特に目新しいことではないが、そこに少しでも「特別感」というエッセンスを盛り込むためには、それぞれの教員の持ち味を生かした工夫が必要である。

例えば、夏休み明け2日前に電話をし「〇〇さんに2学期に会えることをとても

楽しみにしているよ。」と言葉かけをすることで、子どもに自分を見てくれているという安心感を与えられた。また、宿泊学習前には、布団の敷き方やシーツのたたみ方を別室で体験させることにより、自分で寝具の準備をする不安を取り除いた例もある。これらは単純なことであるが、継続して取り組むことは難しい。しかし、本校では各教員が地道に繰り返し行ったことで、子どもと教員との間に信頼感が生まれ、不登校だった子どもが登校し出した事例が増えてきた。

④チームで紡ぐ個別の支援計画作成

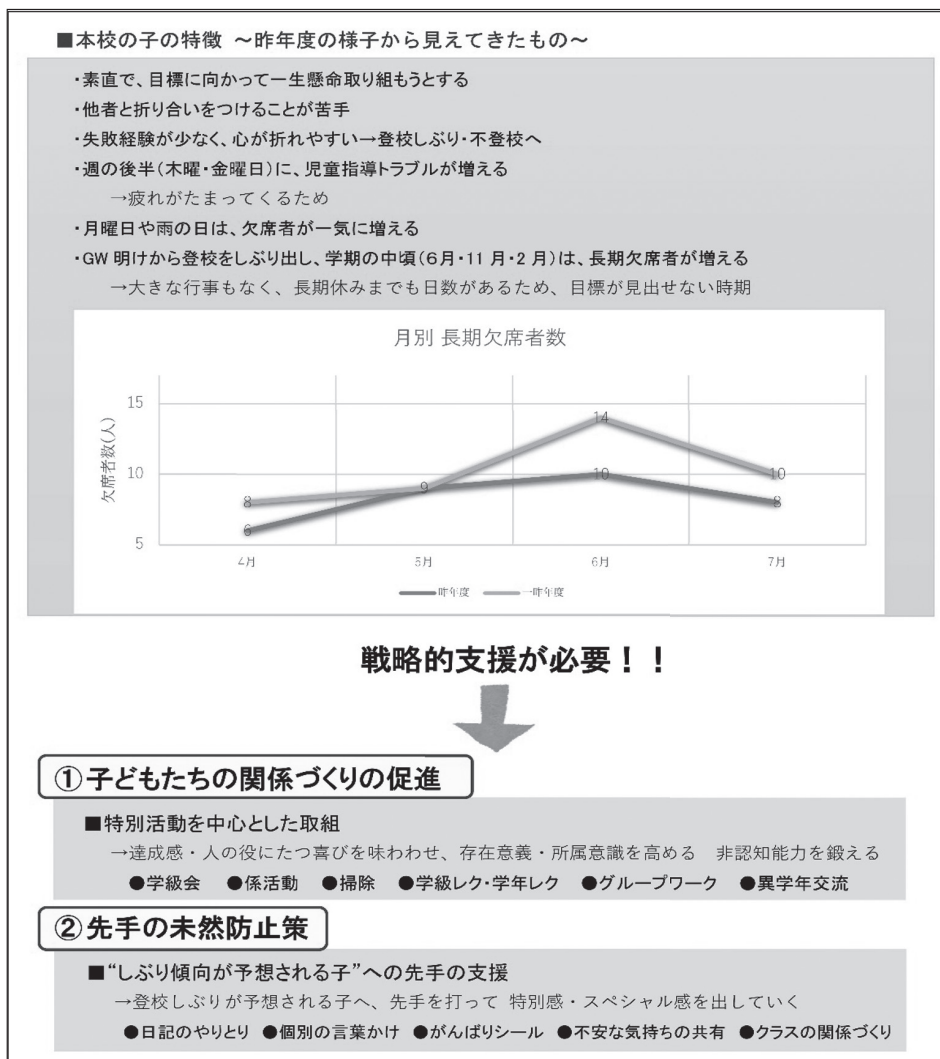
これらの取組を支えているのは、特に配慮すべき1人ひとりの児童の状況に応じて対応方針を定めた「個別の支援計画作成」である。まず、支援計画原案を担当が考え、それを学年・学年団グループで検討していくことで多面的・多角的な視点が加わり、さらに全教職員で情報共有することで、安心感と自信を持って対応できていけば組織は機能するということを改めて実感した取組であった。

個別の支援計画作成例

《支援・指導計画》（通常の学級）		(202*) 年度入学児童		取扱注意				
学年・組	*年 *組	担任名	記入日	2024年 5月 8日				
氏名	*	*	評価評定日	2024年12月18日				
保護者の願い	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく学校生活を送ってほしい ・みんなと仲良く過ごしてほしい ・友だちとのトラブルをなくしてほしい ・声を荒げたり手を出したりするのをやめてほしい 		関係機関・診断名・授業等	サポートルーム				
児童理解のためのチェックリスト※								
聞く	話す	読む	書く	計算する	推論する	不注意	多動・衝動性	対人関係や こだわり等
						5	○6	○28
1,2ポイント以上をチェック ○						6ポイント以上をチェック ○		22ポイント以上をチェック ○
好きなこと、物・得意なこと	<ul style="list-style-type: none"> ○好きなこと…外遊び（ドッジボール、鬼ごっこ、体を動かすこと）、サッカー、空手、カードゲーム、オセロ、生き物探し（カブトムシ）、勉強（特に算数）、収集（コレクション）すること ○好きなもの…ポケモン（メッソン） ○得意なこと…走ること、友だちの面倒を見ること、収集すること、好きなことへの集中力・記憶力 							
課題・困り感・ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の気持ちが一番で、折り合いがつけられない、友だちと意見が違ったときに声を荒げたり手が出たりする。 ○共感性が乏しく、相手が嫌がっていることに気づけない。 ○衝動的でじっとしていられず、授業中の不規則発言や友だちへの強い言葉、離席が目立つ。 							
長期目標	<ul style="list-style-type: none"> ○相手の考えに共感でき、主張や考えを受け入れることができる。 ○自分の考えや思いを言葉で表現できるよう取り組み、マイナスな感情を言葉で伝えることができる。 ○授業の時間に、不規則発言や友だちへの強い言葉、離席をしないようにする。 							
短期目標	誰が・どこで	支援内容・手立て等			振り返り・評価（姿・目標・方法）			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業開始時間から15分間は、自分の席に静かに座っていることができる。 ↓ （2学期） ・授業開始時間から20分間は、自分の席に座ることができる。（静かに離れないので、自分の席から離れないようにすることを目標に） ・授業中、手を挙げてから話すこと、友達の発言を遮らないことを意識する。（45分の中で1回気づいてできる） ・トラブルがあったときは、友達の考えを言い返さずに聞き、担任と何がだめだったか振り返ることができる。 	担任・教室	<ul style="list-style-type: none"> ・ダメなことを注意しても素直に受け入れられないので、担任が良い姿勢で授業に取り組んでいる子を褒めることで、気づかせるようにする。 ・友達の気持ちを最後まで聞かず言い返してしまうことがあるので、まずは最後まで聞けるように声をかける。担任が手をつないでおくことで、じっと聞くことができるので、まずは担任と一緒に聞く。その後、自分の行動を振り返り、ダメだったところを確認していく。 			<ul style="list-style-type: none"> ・「テンションが高くなるとどうしても離席してしまう。」と本人も理解しているので、先生や友達に注意をされたら座ることを目標に変えて取り組んだ。 一友達の注意はなかなか聞けないが、先生の注意では聞けるようになってきた。静かにしているのは難しいので、手を挙げてからの発言、友達の言葉を遮らないようにすることを目標にした。 ・友達の意見は最後まで聞けるようになってきた。自分の行動を振り返ることは担任と2人のほうが素直になれるので、まずは担任と話をしてから相手児童と話を進めるようにする。 ・何がダメだったのかは繰り返し伝えていかないと同じことをしてしまうので、その都度話し合い、自分で素直に言えたところを褒めてあげられるようにする。 			

なお、教師支援としてサポート部から「児童支援通信」が発行され、各々の取組事例を提供することで、教員の経験年数にかかわらず、問題への対応の幅が広がっている。

次に示すものは通信第2号であるが、この号を見た多くの教員が強い問題意識を感じ、改善に向けた様々な方法について話し合いを始めた。



⑤SC、SSW、学校サポーター、日本語指導員の活用

その他の支援体制として、子どもや保護者の相談にはSC（スクールカウンセラー）が対応し、専門的な立場から相談に応じている。さらに、支援体制全体の充実に向けて、学校と外部の支援要素をつなぐSSW（スクールソーシャルワーカー）が定期的に本校に訪問して情報共有を行っている。また、令和5年度から学校サポーターと呼ばれる支援教育の研修を重ねた非常勤スタッフが子どもの見取りや対応を行っている。日本語を母語としない子どもの言語指導については、日本語指導員が定期的に訪問して個別指導を行うなど、様々な角度から支援体制を整えている。

これらの取組は全て支援教育コーディネーターが把握しており、そこからサポート部に具体的な方針として示されることになっている。上記はあくまでも人的環

境であるが、本校の支援教育コーディネーターはこれらの要素を有機的につなぎ、効果的な支援体制が組んでいる。

(2) 安心できる物理的環境づくり

次に本校で整備できる物理的環境についてであるが、「個に応じた支援」として幾つかの学習環境づくりを行っている。子どもの状況は様々であり、どのような環境や形態で支援することが良いのかは違っている。例えば、学校に登校することが全くできない子には、最初の1歩が踏み出せる環境が必要であるし、登校はできても対人関係・コミュニケーションに課題のある子どももいる。また、学習が困難で、そのことが生活全般に影響している子もいる。さらには、外国にルーツのある子にとっては、言語や文化自体が大きな障壁となっている。このような様々な状況に応じて、適切に支援をしていくことは重要であり、次のような支援体制の構築に努めている。

①きっかけの一步づくり(登校支援教室)

校舎1階にある空き教室を使って、様々な理由により学校に登校することができない児童を受け入れる空間を作っている。この教室は、週1回木曜日の午前11時から給食後までという限られた時間の中で児童が登校できるようにしており、玄関からではなく直接校庭から入室できるようにしている。児童は登校支援教室ではスタッフと給食を食べて、退室する流れとなっている。

対応はボランティア職員が行っており、はじめは1時間程度の通室から行い、通室時間を段階的に増やしていくようにしている。主な活動内容は、オセロや将棋などのボードゲーム、卓球やボール投げなどの軽スポーツ、お絵かきやピアノ演奏などの創作活動を通してスタッフとコミュニケーション力を培っている。また、上履き洗い、植物のお世話など、自立に向けた活動にも取り組んでいるが、1人ひとりの実態に応じた学習が進められるように、スタッフがきめ細かに支援している。ここでの最終的な目標は、子どもが自己肯定感を高め、安心して生活できるようにすることであり、将来的には、自立して生活できる基礎的な力を身につけることとしている。

②コミュニケーション力向上(サポートルーム)

相模原市では本校を含めた6校に拠点としてサポートルームが指定されている。サポートルームとは、通常の学級に在籍している子どもで、対人関係やコミュニケーションに課題があり、学校生活に適応することが難しく、困っている子どもに対して、スムーズに学校生活が送れるよう総合的な支援を行う通級指導教室制度である。

本校では、現在4つの部屋に分かれて個別及び集団の指導が行われている。在籍している子どもは、本校在籍が多いが、近隣の6校からも通級している。通常の学級に在籍する特別な教育的支援を要する子どもへの対応に効果を発揮している。

③ふれあいルーム(学習支援)での少人数学習

高学年、低学年に分かれて教室を設置している。高学年は、特に算数を中心にし

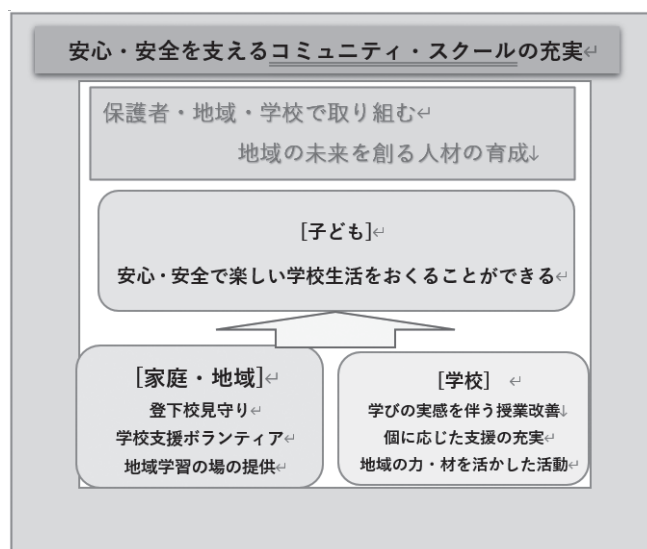
て集団での指導が難しい子どもを少人数で指導しており、学習支援員と呼ばれる教員免許を持った非常勤職員が指導に当たっている。学びの躓きは学校が嫌になる要因の1つと考えるが、ここでの丁寧な指導のもとで子ども1人ひとりが「できた、分かった」という感覚を味わい、学びの意欲を持つことにつながっている。さらに令和6年度はこの取組に加えて、教科担任制と個別対応の2つを加えて算数の指導を実施したことで、より手厚く学びの支援を行うことができている。このような学び全体の計画・立案等については、教科担任が指揮しており、校内研究主任としても本校の学び全般の推進に取り組んでいる。また、低学年では、主に多層指導モデルMIMと呼ばれる「読み」のアセスメントを活用し、低学年段階で学習の躓きの大きな原因の一つである読みの予防的支援を行っている。

5. 保護者・地域の教育力を活用して

令和5年度からスタートした本校のコミュニティ・スクールは、学校経営の基本方針に据えた「すべての子どもが安心して安全に過ごすことができる学校づくり」を実現するために、多様なボランティアを積極的に活用している。

例えば、登下校の安全確保に向けては、地域ボランティアやPTAが旗振りや見守りを行っている。さらに、家庭科の技術指導や安全指導、校外学習の付き添い、水泳学習のサポートなど、各教科等、教育活動全般で積極的に保護者ボランティアを募り、協力を得ている。

このことは、子どもの安心・安全の確保のみならず、保護者に学校教育の実際を理解してもらえる良い機会となっているといったメリットもある。従来の授業参観では、保護者は外から学校教育を眺める観客型参観にとどまるが、ボランティアとして参加することで、教員の指導観や子どもの「困り感」に寄り添った支援に触れることができ、保護者は子どもの成長に向けて貢献する感覚を多少なりとも感じることができる。また、教育現場の実際を間近で見ることで、批判でなく協力者という視点で捉えてもらえる良いチャンスになっている。もちろん、批判対象として学校現場を晒すというリスクもあるが、丁寧に学校の意図を伝えて理解を得ていくことで、協力の輪が保護者や地域の中に広がっているという実感もある。



(R6学校グランドデザインより抜粋)

近年、開かれた学校づくりが求められているが、保護者・地域が学校と協力しながら子どもたちの「生きる力」を育む環境になっていくことが目標である。今、本校は地域の中の学校として教育効果を高めていける可能性を秘めていると実感している。


地域ボランティアの取組事例

宮上小学校の取組みは…

〈子どもの安全な居場所づくり〉
地域の人々が様々な形で協力

学校での日常に参加


☆ 民生委員・児童委員も
学習・おそうじ・読みきかせ
ボランティアに参加
定期的に意見交換会を行う



1年生と休み時間にけん玉遊び
笑い声がひびきます😊

みんなお話し
夢中です😊
次は何のお話か
楽しみ!!

意見交換会より

学 校		民生委員・児童委員
-----	---	-----------

- 学校でふれ合うことにより
子どもたちの知っている大人が増える
- 地域に信頼できる大人がいることで子どもたちが安心して過ごせる
- 気持ちのいいあいさつや
声をかけてくれることが増え
嬉しくなった
- なかなか入る機会がなかった
学校に入り、学校での子どもの
様子をみることもできた
- 子どもたちから元気をもらえる

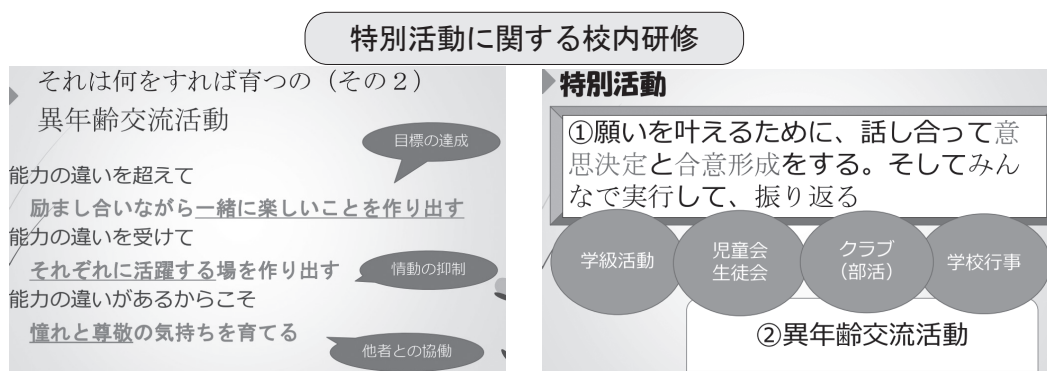
※橋本地区 民生委員・児童委員だより第5号掲載記事より

6. 特別活動を柱にした子どもの自己肯定感の醸成

ここまでは、体制を整え、子どもたちの学びや生活を支援することが中心の取組であったが、支えるだけでなく、これからは子どもたちの将来に向けてさらに必要な力を育てて伸ばし、自立に向けて力を身につけさせていく取組が重要であると考えます。そこで、今年度から重点として取り組み始めたことが特別活動の充実である。そこでは、1年生から6年生までを縦割りにして学校行事等でその機能を活用していくものであるが、これはどこの学校でも取り組んでいることであり、目新しいものではない。しかし、コロナ禍により子ども同士が話し合うことや触れ合うことが難しい状況で3年もの間過ごし、子どもが本来身につけるべき力が育っていない現実を目の当たりにした。それは、他者と話し合っただけで折り合いをつけるとか、課題解決に向けて協力をするとか、そもそも各自の抱える課題を乗り越えるといった力が身につけていない現実が見えてきた。もう一度、そういった力を身につけさせていくために、特別活動の在り方を見直し、集団の編成や話し合いの仕方・進め方、活動計画の立て方や振り返り方を丁寧に見直すことから始めた。

ただし、そうは言っても、教員全員の士気をあげていくには「きっかけ」が必要であった。そこで、私が過去に講演を聞き、心底感動した講師の存在を思い出した。それが、八王子学園なかよし幼稚園園長の清水弘美氏であった。清水氏は、元公立小学校で校長まで勤められ、特別活動をはじめとして広く活躍された先生である。早速連絡を取り、

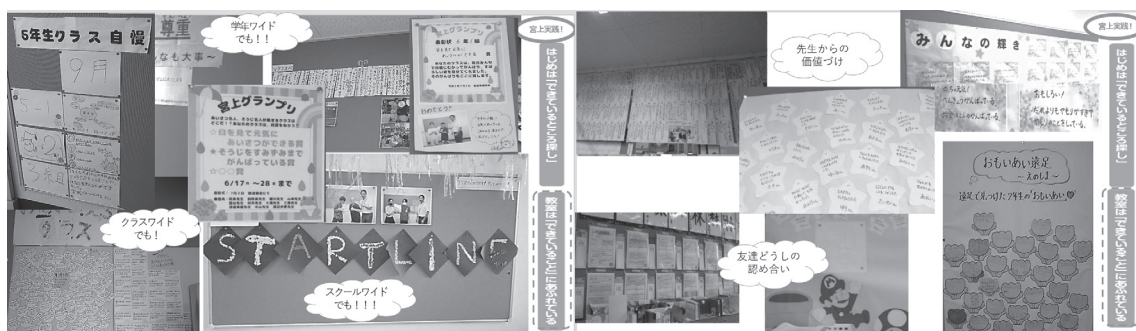
本校研修会に講師として招いた。そして、この研修会が本校の多くの教員の心に火をつけた。ベテラン教員も経験年数の浅い教員も特別活動についてじっくり学んだ。その様子は、まるで海綿に水が染み込むようであった。「自分たちに何ができるのか」「何をやればいいのか」「どうやればいいのか」を真剣に考え、計画を立てることができた。そして、その計画の中心に、子どもたちの自己肯定感を高めるという目標を確認できた。



※校内研修資料より(講師 八王子学園なかよし幼稚園園長 清水弘美氏 作成)

そして、特別活動を柱にした様々な取組がスタートしたのであった。まず、縦割り班編成を行うことに取り組んだが、ここで教員が強く意識したことは、本校の子どもたちの課題であった「他者との折り合いをつける」ことの解決に向けた「意思決定」と「合意形成」であった。

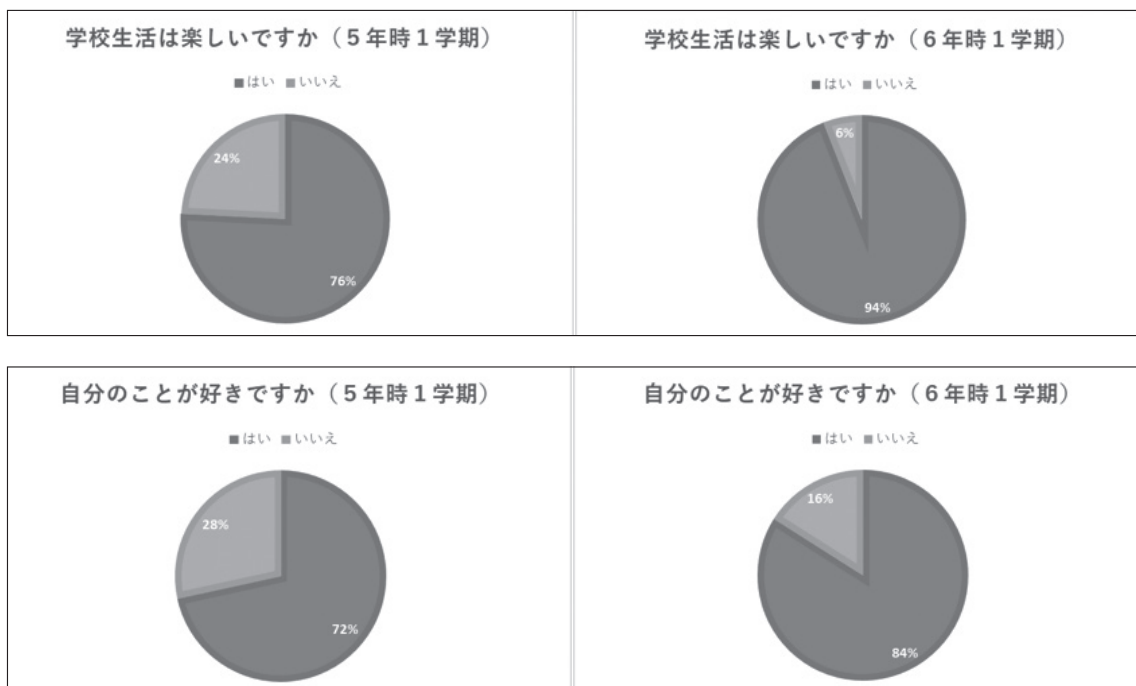
また、子どもたちに強く意識させたことは、「リーダーシップ・フォロワーシップ」と「話し合い」の大切さであった。6学年は1学年とペア学年を作り、日常の活動から関わりを増やしていった。それは、縦割り班の取組がやらされでなく、必然性を持ったものになるようにするためであったが、驚くほど子どもたちの変容として表れていった。特に、前年度落ち着かなかった6年生の変容には驚くものがあった。低学年の世話をする喜びや責任感、憧れを持たれる喜びなど、それまで実感してこなかった6年生は、みるみるその姿を変えていった。例えば、登校をする際には、重たそうにしている1年生の荷物を持ってあげたり、手を引いてあげたりしながら、安全に登校できるようにサポートしていた。登校後も1年教室に行って学習の支度を手伝ったり、休み時間には一緒に遊んだりするなど、様々な時間にその交流の姿は見られるようになった。それに伴って、6年生の表情には自信というか、自覚のようなものが見え始め、去年の姿が嘘のように感じるほどであった。この子どもの変容は、教員の更なるモチベーションの高まりにつながった。次に示すものは、児童会活動及び学級活動における取組であるが、各学年・学級の頑張りや良いところを探し、校内掲示をすることで互いの良さを知り、他学年とのつながりを深めている。



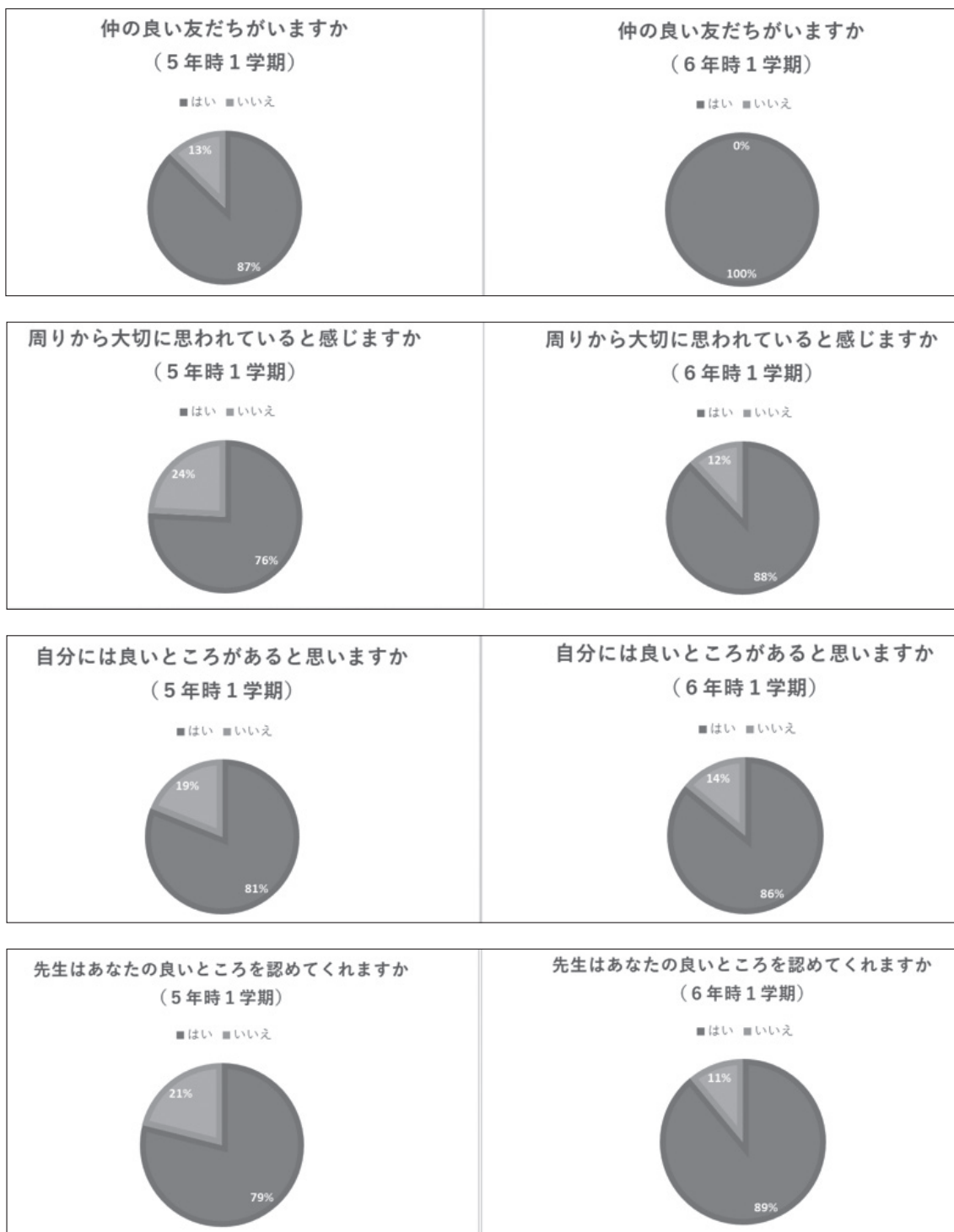
ここまで述べてきた取組は、他校の先生方から見れば、「そんなことどこでもやっている」と言われそうである。しかし、その1つ1つの取組の狙いや意味を見つめ直し、全教員で目標に向かって同じベクトルで取り組むことで、こんなにも子どもたちが変化するのかと感動さえ生まれた。現在も全教員のモチベーションは上がり続けている。

7. 見え始めた取組の成果

次に示す円グラフは、現在の6年生に対して行った学校生活アンケートの結果である。左側の円グラフは令和5年度、右側は令和6年度の結果である。同様のアンケートを2年間実施しており、同集団の変化を見取ることができる。全ての項目で「はい」と回答した割合は増えており、これまでの取組の成果を示しているといってもよいのではないだろうか。特に着目すべきは、「仲の良い友だちがいますか」という質問項目に対して100%の子どもが「はい」と回答している。昨年度は落ち着かず、トラブルも多かった学年であるが、他者とのかかわりが良好であるということは、成果が複合的に表れたと言えるのではないだろうか。



※令和5年度及び令和6年度学校生活アンケートの結果より



※令和5年度及び令和6年度学校生活アンケートの結果より

8. 今後に向けて

これまでの取組成果の1つとして、教職員一人ひとりが、子どもたちの自己肯定感の高まりを実感できたことが挙げられる。日々の学校生活の中で、子どもたちの学びに向かう姿勢や他者との関わりに変化が見え始めたことで、教職員の取組に対するモチベー

ションが上がり、結果として良いスパイラルに入っていると感じている。さらには、ボランティアとして学校支援に参加した保護者・地域の人たちの学校理解も進み、教育活動への参加者が日に日に増加していることも成果であった。

しかし、ここからが本番だと思っている。なぜなら、子どもたちを取り巻く状況は年々、複雑化しており、それに伴い学校は、常に適切に対応していくことを求められるからである。そのような多様化していく現実に対して、すぐに解決できる特効薬はない。だからこそ、私たち教職員は、常に子どもたちの姿をしっかりと見ながら、考え得る課題解決に向けた様々な取組を「多層的」に展開することが重要である。

私たちは、学校としてできる「当たり前の取組」を組織的に行っただけに過ぎない。その1つ1つは特別なことではないかもしれないが、これからも教職員1人ひとりの持ち味を生かしながら、それぞれの役割を機能させ、コツコツと取り組んでいくことで、学校は変わっていけるのだと思う。

今回、紹介していない他の取組も多数あるが、それらも全て「安心・安全な学校づくり」という目標に向けて取り組んできたものであり、その全てを多層的に展開してきたことで、子どもたちの安心を作り上げることができたと実感できた。今後も、全ての児童が安心できる学校づくりを目指し、教職員の人入れ替わりがあっても機能する組織を維持しながら、地道に取組を展開していける学校でありたい。

研究題目

平成7年豪雨災害の記憶をつなぐ防災教育 ～2年間の保小中合同避難訓練を通して～

目 次

- 1 はじめに ～小谷村と災害～
- 2 研究のねらい
- 3 研究経過と内容
 - (1) 保小中合同避難訓練・引き渡し訓練
 - (2) 保小中合同避難訓練・防災学習発表会
- 4 研究の成果と今後の課題
 - (1) 研究の成果
 - (2) 今後の課題
- 5 おわりに ～VUCA時代を生き抜く生徒に～

長野県小谷村立小谷中学校 校長 小林 かおる

1 はじめに ～小谷村と災害～

小谷村は、県の最北西部に位置し、中部山岳、妙高戸隠連山に囲まれた静かな山里である。村の中央を南北に縦断して流れる姫川は、白馬村佐野坂に源を発し、飛驒山脈等を水源とする土砂流出の激しい急流支川と合流しながら北上し、日本海に注いでいる。姫川東側の山地は「糸魚川～静岡構造線」の活動の影響を受けた地層が褶曲し、断層によって切られ、地滑り地が密集している。また、日本屈指の豪雪地帯であり、湖沼や湿原が点在し、豊富な地下水による大規模な山崩れの危険性を秘めた地域である。

近年では、平成26年(2014年)の神城断層地震において最大震度6弱の揺れが村を襲い、全壊33棟の住家被害をはじめ、地滑り8ヶ所、土石流5ヶ所と多くの被害に遭った。

このように、古くから地滑り、鉄砲水、土石流、台風、洪水、雪崩等に見舞われた災害多発地域であり、「山崩れを防いだ八幡様」「大雪崩を防いだ腕無し地蔵」等、災害に関する信仰や諺、言い伝えも多く残る地域である。

2 研究のねらい

災害多発地域に暮らす生徒にとって、防災学習は自らの安全を確保するため必要不可欠であり、学校は地域に応じた具体的な防災教育を展開する義務があると考えられる。

本研究は、地域の過去の災害を知り、自分なりの言葉で伝えることを通して、災害に対する的確な思考・判断に基づく適切な意思決定や行動選択ができる

力、自分や家族の安全を確保するための日常的な備えができる力、地域社会の安全活動に進んで参加・協力・貢献できる力の育成を願った防災教育のあり方について一考を投じたい。

なお、地域災害の中で扱った事例(教材)は、現在の生徒が生まれる前に起こった平成7年(1995年)7月豪雨災害とした。

なぜなら、地域固有の自然災害(河川氾濫、地滑り、土石流)であるとともに、復旧に長年の時間を要したことに加えて、当時の村の人々の願いや行動に想いを寄せて、人的被害がなかったことを誇りに感じながら、これからも教訓として伝えていってほしいと願ったからに他ならない。

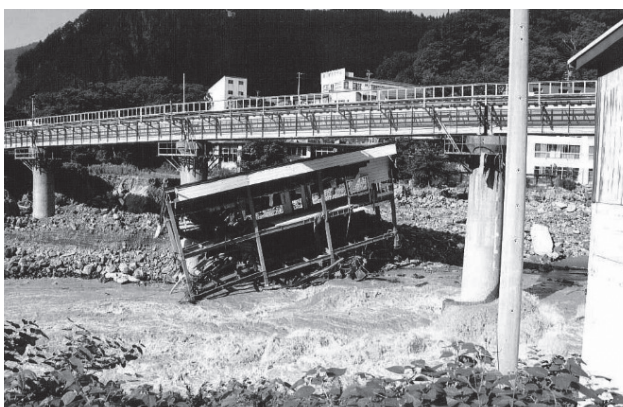


表1 平成7年(1995年)7月豪雨災害の概要

○ 平成7年7月11日から12日にかけて、新潟県との県境山岳地帯に梅雨前線が停滞し、大北地区に記録的な集中豪雨が発生した。

○ 一級河川である姫川・関川・黒部川が氾濫。地域住民の直接的被害は少なかったが、避難者多数。道路や鉄道のインフラが復旧するのに数年を要する被害が出た。

○ 2021年には、この災害が日本海からの暖かく湿った空気が山岳地形に流れ込み積乱雲が次々に発生した「線状降水帯」の可能性が示唆されている。



3 研究経過と内容

(1) 保小中合同避難訓練・引き渡し訓練

小谷村では、保育園、小学校、中学校の15年間を見通した一貫型教育を進めるため、保小中合同職員会議を設置し、様々な研修や取組を実施している。令和2年度には交流活動・交流学習部会が新設され、「合同避難訓練・引き渡し訓練」についての検討をはじめたが、コロナ禍ゆえ感染症を危惧し、令和3年度は合同避難訓練に留まり、令和4年度については、感染状況を鑑みながら合同の引き渡し訓練まで実施するに至った。

実施にあたり、「合同避難訓練・引き渡し訓練マニュアル」を整備した。村教育長と各校園長の伝達経路や避難所となる小学校への移動方法を確認したり、誘導、引き渡し、救護等の係分担や配置を検討したりした。なかでも、兄弟姉妹が掌握できる引き渡し名簿の作成と迎えに来る保護者の動線を考えることには苦労した。



表2 合同避難訓練・引き渡し訓練職員反省

- 子どもの居場所が分かる表示札や行き帰りの動線を確認したことで混乱なくできた。保育園にはオムツやパンツの子がいる中、待機場所をトイレ近くにしていただきありがたかった。(保育園職員)
- 今回、二次避難の移動は円滑に行えたが、積雪期には、2台あるバギーに未満児を乗せて移動することは車輪が動かず難しい。冬期間の移動について検討する必要性を強く感じる訓練になった。(保育園職員)
- 保育園児と中学生は体育館内を靴下で行動していたが、災害時は床に瓦礫が散乱しているため、内履きを履いたまま避難した方が良い。(小学校職員)
- 生徒・職員とも緊張感をもち訓練していた。リアリティを求めれば、余震を想定した二次避難の情報を伝えつつ行動を起こすことで、その判断基準を各校園長と教育長による意思疎通が必要。(中学校職員)
- 長時間待たされていた子どもも落ち着いて取り組んでいたのは、職員の支援あってと感じた。心配していた保護者の車両の流れもスムーズで、校舎内の引き渡しも良い。来年度以降は、地域の安心安全の家を確認したり、非常食体験や簡易段ボールベッド体験をしたりするのもよい。(中学校職員)

ほとんどの職員が初めて経験する合同での訓練であったが、概ね計画通りできたと評価している。また、実際にやってみて初めて分かったことが反省に挙げられていたが、次年度以降の改善に向けた収穫と捉えたい。さらに、実際の災害時における引き渡しの判断は、道路状況も含め、帰宅後もライフラインが確保されていることが前提なので、教育委員会を經由して村総務課(災害時は危機管理対策部)と情報共有できる仕組みづくりについて協議していきたい。いずれにしても、被災変時の生徒・職員の安全確保は校長判断が最優先になるが、行政との事前の意思疎通が重要な判断材料の一つとなると考えるからだ。

(2) 保小中合同避難訓練・防災学習発表会

令和5年度には保小中合同避難訓練は実施するが、引き渡し訓練は3年に1回実施することとした。

なぜなら、令和4年度実施により、多くの保護者・教職員が一定のノウハウを身に付けたことからマンネリ化の防止を図るとともに、もっと生徒が主体的に学ぶ防災教育への展開を図りたかったからだ。

そこで、本校3年生が挑む総合テスト理科の出題分野「気象のしくみと天気の変化(2年次)」における復習を兼ねた日本の四季の特徴や平成7年豪雨災害における天気図等の見方を端緒に、災害を経験した地域の方から被害の様子や避難生活等、当時の状況を学ぶことから防災学習が始まった。

① 防災学習①【ビデオ視聴、講演会】

ビデオ「平成7年7月11日 梅雨前線豪雨災害の記録」を視聴後、小谷村関芳明教育長(当時は水道課職員)から当時の様子をお話いただいた。

ビデオを視聴しながら、普段、通学に使っている道路や橋が崩壊している様子を目の当たりにした生徒たちは、思わず嘆息が漏れ言葉を失った。

関教育長からは、「厚い雲が2、3日空に留まり、村全体に大雨と土砂崩れが起こり、役場の電話が鳴りっぱなしだった」「中土に住む老夫婦を負って救助した」「多くの施設が被災し復旧に苦勞した」「今でも雨が強く降ると当時を思い出し、怖さを覚える」等の話を聞くことで、生徒たちは、避難生活の様子や復旧への道のり等、被災当時の話をもっと詳しく知りたいという願いをもった。

また、近年各地で多発するゲリラ豪雨や線状降水帯による水害に思いを馳せると、28年前の災害の話に留まらず、災害への備えはどうあるべきか、地域の課題や自分ごととして考えるようになっていった。

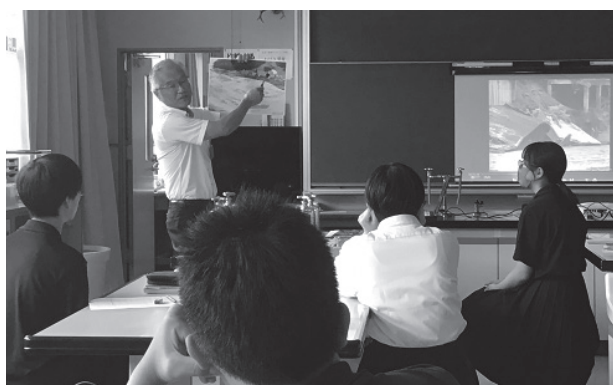


表3 防災学習①【ビデオ視聴、講演会】における生徒の感想

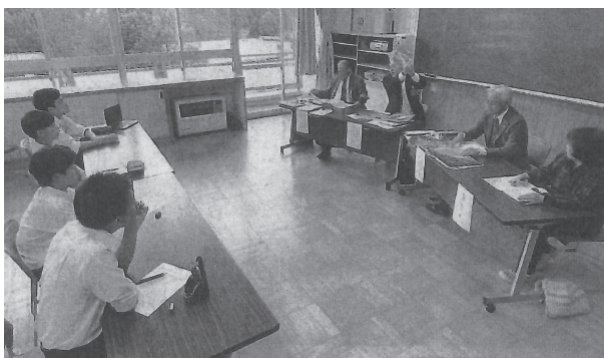
- 平成7年の災害は聞いてはいたが、ビデオを見て広い地域で被害があったことや、川の氾濫だけでなく山の土砂崩れもあったことを知ってとても驚いた。
- 自分の家をはじめ村中で大きな被害があったことにびっくりした。今はきれいな村だけど、災害時にはたくさんの土砂、石、木等に埋め尽くされていた。当時の人の頑張りが今に現れていると思う。
- 人的被害がなかったのは奇跡だと思った。孤立した家は買い物とか難しかったと思う。
- 家に土砂が流れ込んだり、道路がなくなったり、大きな被害だったことが分かった。避難所の生活や孤立した生活は大変だったと思う。
看護師さんが歩いて訪問してくれたことは、大きな安心になったと思う。復旧に向けての団結力がすごいと思った。
- 村の人々が、まず自分からできることをやった結果、大糸線が復旧できたと思う。互いに助け合うことで、絆も深まったのだと思う。私たちも「助け合い」と「自分から」を大切にしていきたい。

② 防災学習②【災害に関わった方による座談会】

平成7年豪雨災害の被災状況やその復興をより深く学びたいと願う生徒たちに、当時、災害に関わった方々による座談会を計画した。講師には、「当時の記憶で一番印象に残っていること」「災害時や、災害後、一番大変だったこと」「避難生活の様子や小中学生の様子」「復興に要した年月」など、事前に生徒が関心をもつ出来事について焦点を絞ってお話いただくよう事前をお願いした。

上川 喜一さん(当時 役場総務課防災担当)からは、避難所の設置・運営、不足する物資の供給計画等のお話をいただいた。また、吉岡 久人さん(当時 消防署職員)から、護岸作業や要救助者の救助の様子を、松澤 敬子さん(当時 小谷村診療所看護師)から、避難所の衛生管理や救護者の手当をはじめ、高齢者宅への訪問診療などのお話をいただいた。

さらに、今井 頌治さん(当時 今井工務店社員)からは、苛酷な災害復旧現場と翌年の蒲原沢土石流災害の悲劇(14名の作業者が亡くなる)から、人間が立ち入ることができない危険な作業現場において、大型作業機械を遠隔操作で作業を行う「無人化施行」を全国に先駆けてきたことも教えていただいた。



講師一人ひとりの歴史に触れた生徒たちは、食い入るように話を聞き、メモをとりながら、質問をしていた。

表4 防災学習②【座談会】における生徒の感想

- 当時の写真から、道路が崩れ、沢がV字型になり、田畑が水で埋もれていることが分かり、こんな大災害にあったと思うと怖い。避難している人も、家を離れ、食料も十分でなかったことを知り、大変だったことが伝わった。他人事とは思わず、いつ災害が来てもおかしくないので、できる限りの対策をしたいと思った。
- 昼の2時で明るい時間帯なのに、「外が真っ暗になっていた」の話が衝撃的だった。皆さんそれぞれが村の復旧のために努力したり、避難先で頑張ったりしたことが分かって良かった。
- 米はあるのに水がない時、「プールの水を使おう」の発想にびっくりした。住民の工夫や団結力が死者ゼロにつながったのだろうと思った。
- ヘリコプターでの物資供給や、連絡手段に無線を使う中、高齢者の常備薬確保が一番困難だったことや短い道路の復旧工事でも1ヶ月もかかることから、災害対応や復旧のあり方も考えなければならない。

③ 防災学習発表会準備

座談会の講師から、「豪雨災害の記憶を風化させてはならない」の発言を受け、自分たちの学習成果を後輩に伝えることにより強い意義を感じとった生徒たちは、年代に応じて伝えたい内容とそれに見合う写真・図表等を選び、A2版のパネルを使った紙芝居形式にまとめていった。

また、話し方を選んだり、飽きさせないように一部をクイズ形式にしたりするなど、グループで工夫しながら活動を進めていった。発表練習では、仲間からアドバイスをもらったり、タブレットで録画して振り返ったりもした。

繰り返し練習をするなかで、「体験していないことを伝えるのは難しいが、自分ならどうすべきかを考えられるような発表にしたい」「今の小谷村があるのは、災害時に復旧に携わった人たちが頑張ってくれたおかげで、犠牲者がなかったのは、人々の協力のおかげであること。行動することに意味があることを伝えたい」「午後2時に空が真っ暗だったということから、異変を感じたときには用心すること。自分の命は自分で守ることを伝えたい」と、一人ひとりが特に伝えたいことが願いへと膨らんでいった。



④ 保小中合同避難訓練・防災学習発表会

地震を想定し、小谷保育園、小谷小学校、そして本校が、それぞれの避難マニュアルに基づき一次避難をした。その後、各校園長と教育長が報告し、教育長の指示により指定避難所の小谷小学校へ二次避難を開始した。

小雨が降る中、小学校体育館まで10分程度歩みを進めて二次避難を完了した。昨年度に引き続き2回目の訓練ということもあり、生徒・職員とも迅速に行動することができた。訓練後の休み時間に、3年生が「傘を差しての避難の可否」について、話し合っていた。「緊急に避難を要する場合は、傘を差さずに走って逃げる」に対して、「避難所での生活を考えると健康被害のリスクを避けるため、傘を差して逃げる」の意見が出されていた。災害時における行動に絶対無比の正解はなく、その場その場での判断と行動が必要になる。日頃から様々な場面を想定することの大切さを感じとっている生徒を頼もしく感じた。



続く、「防災学習発表会」は、保育園を年長・年中と年少・未満児の2グループに、小学校を低、中、高学年と3グループに、中学校を1・2年の1グループ、計6グループに分けて体育館の各所にブースを設けて行った。

保育園グループは、子どもの目の高さに合わせてパネルをかざし、ゆっくりと丁寧な口調で話すことを心がけていた。小学生グループは、たくさんの質問を一旦受け止めながら、「皆さんなら、どうしたと思いますか」と予想させながら、当時の人がとった行動の説明をしていた。



逆さまになったガソリンスタンドや水没する老人ホームや倒壊する近所の建物の写真を見て驚きの声を上げる園児や児童。社会見学で訪ねた砂防事務所と関連づけて質問をする児童。土砂災害の恐ろしさを感想に述べる児童。地域の人々の助け合いによって行方不明者や死者が出なかったことに感嘆する児童。地域の過去の災害を伝える学習は、年齢差を越えて地域で暮らす全員の課題として位置付いた時間となった。

その後、「まとめの会」における校長講話では、東日本大震災において、岩手県釜石市の鶴住居小学校と釜石東中学校の児童・生徒約570人が全員無事に避難することができた「釜石の奇跡」が、日頃からの防災訓練の結果であり、私たちと同じように毎年、合同避難訓練を実施していたことに



ついて触れた。そして、「小谷の奇跡」という災害は起こってほしくはないが、「いざという時、自分の命を守るため、どのように行動するのか？」訓練を振り返るとともに、仲間や先生方、家族とも話し合うよう呼びかけた。

表5 合同避難訓練・防災学習発表会における小学生アンケート結果

① 小谷村に豪雨災害があったことを知っていましたか	
知っていた	37.1%
知らなかった	62.9%
② 中学生の発表は分かりやすかったですか	
そう思う	92.8%
どちらかと言えばそう思う	7.2%
③ 小谷村にあった災害についてもっと知りたいですか	
そう思う	63.9%
どちらかと言えばそう思う	30.9%
どちらかと言えばそう思わない	3.1%
そう思わない	2.1%
④ あなたの家族は、地震や大雨があった時のことについて、よく話し合っていますか	
そう思う	19.4%
どちらかと言えばそう思う	45.9%
どちらかと言えばそう思わない	21.4%
そう思わない	13.3%
⑤ 学校で避難訓練をすることは大切だと思いますか	
そう思う	91.8%
どちらかと言えばそう思う	8.2%

小学校児童98名のアンケート結果から、半数以上の児童が平成7年豪雨災害を初めて知ったことが分かった。また、中学生の発表については、ほとんどの児童が分か

りやすかったと回答し、話し方を工夫したことや写真や図を効果的に使ったことが評価された。

さらに、「小谷村にあった災害についてもっと知りたいですか」の質問に95%近くの児童が肯定的な回答をしており、地域災害への関心が高まるとともに、防災や減災への意識が芽生えるきっかけになったと考える。

一方で、学校における避難訓練の意義を十分に感じとってはいるが、「あなたの家族は、地震や大雨があった時のことについて、よく話し合っていますか」の質問に、「そう思う19.4%」「どちらかと言えばそう思う45.9%」に留まっている。今回の防災学習発表会が、過去の地域災害や、災害時にとるべき行動等について家庭で話題に上るきっかけになればと願う。また、今後も学校における防災教育の意義や実践と成果を家庭に周知していく必要性を改めて感じる結果となった。

表6 合同避難練・防災学習発表会における職員の反省

- 3年生の発表が子どもたちの心に響いて、みんな真剣に聞いていたのが印象的でした。発表した生徒にとってもいい経験になると感じた。今後も繋げていってほしい活動です。(保育園職員)
- 対象児童を考えた話し方や示し方、受け応え、問いかけで、嬉しい成長ぶりでした。来年度以降も3年生のプレゼンを位置づけたい。(小学校職員)
- 自分たちの住む地域でどんな災害が起こり得るのか、想像できた説明でした。(小学校職員)
- 現実社会に自分の学びが活かされる機会だった。中学生が年少の子どもたちと関わる意義を感じた。パネルはグループごとに使う順序が異なり、話す言葉も相手意識を感じた。M生は、保育園児に「〇〇の時はね…。」「〇〇はどう思う？」と問いかけながら話していた。園児も児童も一生懸命聞いてくれるので、3年生も嬉しかっただろうし、自己肯定感が高まる瞬間だったと思う。保小中の連携とはこのことだと納得した。(中学校職員)
- 平成7年豪雨災害は、地域にとって風化してはいけない災害。中学3年生が語り部となり伝えることで、家庭や地域で考えるきっかけとなる。来年度は、非常食を食べたり、段ボールベッドを使ってみたりする避難所体験も考えられる。(中学校職員)

4 研究の成果と今後の課題

防災教育は、様々な危険から自分や周囲の人の安全を確保する教育である一方、防災教育を通して、教科学習に関連する資質・能力を高めると同時に、地域理解やキャリア教育にもつながることが明らかになった。以下に本研究の成果と今後の課題について述べる。

(1) 研究の成果

① 地域固有の災害についての知識が身についた

季節風の影響を受ける日本海に面した山岳地域である小谷村固有の自然環境は、河川氾濫や土砂災害が他の地域より警戒しなければならないと感じた生徒が多く、地域

固有の災害に対する知識が身についた。

② 地域の人々に愛着と誇りの念が深まった

災害時、様々な立場で関わった地域の方々の話を聞くことで、先人たちへの畏敬と感謝の念が培われるとともに、災害多発地域に暮らす自分たちが、これからどのように地域社会に貢献できるか自身に問う学習になった。

③ 発表する学習課程(伝承)は深い学びにつながった

自分たちが学習した内容を保育園児や小学生に発表する学習課程を設けたことで、さらに深く調べていこうとする態度の育成につながった。また、どうやったらうまく伝わるか、相手意識をもつことで、伝える内容や言葉を選んだり、例示を挙げて説明したりするなど、表現活動の工夫につながった。

(2) 今後の課題

① 土砂災害を想定した垂直避難

小谷村防災マップでは、本校裏山が〔(急傾斜・土石流)土砂災害特別警戒区域〕にあたるため、校舎西側半分が、〔(急傾斜・土石流)土砂災害警戒区域〕に指定されている。これまでの避難訓練では、火災、地震を想定した訓練が多かったが、土砂災害を想定した訓練がなかった。そこで、2月には土砂災害を想定した「垂直避難」の訓練を実施した。

具体的には、地震発生による土砂災害警報の発令を受け、緊急避難として本校最上階の3階中央部に位置する社会科教室に全校生徒が一次避難する。その後、安全を確認しながら、指定避難所である小谷小学校へ「水平避難」をするものである。また、事前予告なしの休み時間の時間帯で、停電による放送機器が使用不可の状況の中、メガホンで避難指示をする。さらに、校長・教頭が出張不在という状況で、携帯電話による報告と指示を行った。

② 発達段階に応じた計画的な防災教育

防災教育は避難訓練のみに行われるものではなく、小谷村における防災教育の一層の充実を図るため、今後は、各校園で実施している防災教育を教育活動全体で見直し、教科横断的な視点(カリキュラム・マネジメント)で再編成したい。また、保小中の発達段階に応じた15年間における一貫したカリキュラムを作成したい。

5 おわりに ～VUCA時代を生き抜く生徒に～

令和6年1月1日、能登半島で巨大地震が発生し、死者数200名を超える大惨事となっている。1週間後、3学期を迎えた本校生徒会長は、生徒集会にて「被災者に自分たちは何ができるのか話し合ってみよう」と提言した。その後、能登半島地震のニュースを視聴し熟議した結果、募金活動を行うこととなった。

表7 第1回生徒集会における生徒会長の提言

今回は令和6年能登半島地震について知り、自分たちにできることを考えたいと思います。本当は、新生徒会最初の生徒集会のため、新しい委員会での具体的な目標やアドバイスなどを話し合おうと思っていましたが、新年早々、死者数が200人を越える能登半島地震という大きな災害が起きてしまいました。

もし、急に自分の周りから、大切な友達や家族がいなくなってしまうと考えるだけでも苦しくなってきませんか？幸いにも、被害に遭わずにすんだ方もいらっしゃると思いますが、その方の仲の良かった友達、いつも挨拶を交わす近所のおばあちゃん、大切な家族などを急に失い、苦しんでいる人がいます。

そこで、校内の一人ひとりの良さを認め、大切にすることでなく、日本や世界全体の一人ひとりを大切にするためにも、私たちに何かできることはないのか話し合ってみようと考えました。

(小谷中学校第46期生徒会 会長による提言)



防災教育を通して生徒の防災に対する考えは自分や家族から地域社会へ、さらに広い視野で考えられるようになってきていることを実感し、今後も防災教育を視点にした人間形成を図っていくことを決意し、本研究の報告を終える。

(執筆責任者 令和5年度 校長 出口 哲朗)

研究題目

生徒が主役の三者懇談会のススメ

～学修インタビューの取組¹⁾～

目 次

- 1 はじめに
- 2 学修インタビューとの出会い
- 【神戸市立葺合高等学校での実践】
- 3 学修インタビューの実施
- 4 学修インタビューの実施に係る教員アンケートの結果
- 5 学修インタビューの実施に係る生徒アンケートの結果
- 6 学修インタビューの実施に係る保護者アンケートの結果
- 【神戸市立六甲アイランド高等学校での実践】
- 7 背景と目的
- 8 取組内容
- 9 結果
- 10 考察
- 11 まとめ
- 12 今後の展望

神戸教育研究所 長谷川 伸

（神戸市教育委員会事務局学校教育課 長谷川 伸）
同 学校支援部学校経営支援課 釜谷 尚史）

1) 「学修」とは、知識や技術を学び習う意味の「学習」に対し、一定の期間知識や技術を学んで身につけることを意図する。モデルにした高槻中・高等学校が「学修」を使用していることから、本論文においても「学修」を使用する。

1. はじめに

本論は、長谷川の前職場である神戸市立葺合高等学校と釜谷の前職場である神戸市立六甲アイランド高等学校で実施した三者懇談会における実践研究をまとめたものである。2から6は長谷川の実践、7から9は釜谷の実践による。

2. 学修インタビューとの出会い

平成30年度、外部研修に参加した際、高槻中・高等学校が行っている「学修インタビュー」の取組が紹介された。それは、年度末に生徒が1年間の学修を振り返り、担任・保護者に向けてプレゼンを行った後、三者による質疑応答を行うものであった。

三者懇談会といえば、担任が生徒の様子を話したり、家庭での様子を聞いたりするものと思っていた。保護者は、担任から我が子の学校生活や学習の状況を聞き、落ち着いた学校生活に安堵することもあれば、初めて知る事実に立腹されることもあった。そして、何より生徒本人は、担任や保護者が何を言い出すのかとハラハラして気が気でない時間を過ごしたかもしれない。

一方、学修インタビューは、このような従来型の懇談会から生徒が主役の懇談会へとパラダイムシフトを起こすものであり、これまでの三者懇談会の姿が大きく変わるのではないかと大きな期待を寄せた。

【神戸市立葺合高等学校での実践】

3. 学修インタビューの実施

(1) 実施に向けて

翌年(令和元年)度、1年生の学年主任を務めることになった。本来であれば、1年生の段階から学修インタビューを導入したかったが、その他の業務に追われてしまい、提案する余裕がなかった。しかし、ずっと頭の片隅で意識していたため、秋ごろから2年生での実施に向け、少しずつ準備とシミュレーションを重ねた。

翌年度4月の第1回学年打合せ会で提案し、11月の三者懇談会で学修インタビューを実施する了承を得ることができた。「時間がかかりすぎるのではないか」「3年生の選択科目の決定を優先しなければならないが」と懸念する声があがったが、選択科目の決定に繋がる内容のプレゼンをさせることで合意を得ることができた。(もともとのこの時期の懇談会の主目的は選択科目の決定である。)

(2) 準備

7月から具体的な準備を進めた。勤務校では毎年、夏休み課題としてオープンキャンパスについてのレポート課題(大学調べ)を課していた。進路選択の観点から学修インタビューともリンクするため、夏休み前に学修インタビューについて予告した。生徒及び保護者に具体的なイメージを持ってもらうため、学年集会(生徒対象)と進

路・修学旅行説明会(保護者対象)の場で、教員によるデモプレゼンを実施した。また、生徒のプレゼン方法としては、探究ノート(スケッチブック)を準備し、紙芝居のようにプレゼンを行うことにした。

10月になり生徒は探究ノートを活用して準備を進めた。準備には3時間を充てた(図1)。

学修インタビュー指導例		
配当時間 ：2時間又は3時間 準備物 ：説明プリント、探究ノート、サインペン(カラーペン可)、逆引き辞典配付		
1時限目：学修インタビューの目的を共有し、発表スライドを完成させる		
時間(分)	内容	備考
	準備物の確認	探究ノート、逆引き辞典の配付
10	教師による説明 →説明プリントに沿って、学修インタビュー全体像を確認する ※クラスを超えて発表・質疑応答を行うこと、最終的に保護者懇談会で行うことを確認する	実施する目的については、説明プリントに記載のものに加えて、先生方の解釈を語っていただくと生徒の意欲が上がります
15	スライド作成を行う 終わった生徒から、個人リハーサル	生徒によっては、ペア・グループ作業で実施することが有効かもしれません
15	3人グループでリハーサル	ペア・グループ作業で進めたクラスは、新しいメンバーでのリハーサルをお勧めします。次回、クラスを超えて行いますので、緊張感を持たせることができれば。2分～3分で発表+2分間の質疑応答
5	スライドの追加・修正	用紙は贅沢に使わせてください
2時限目：他者の発表(スライド)から学び、自身の発表(スライド)をブラッシュアップさせる クラス内リハーサル(お隣のクラスと他流試合もあり！？)		
時間(分)	内容	備考
5	スライドの最終調整及び個人リハーサル	カラーペンを使うと、聞き手に伝わりやすいスライドになるかも
30	(クラスを超えた場合を想定して、)5～6人グループでリハーサル	2分～3分で発表+2分間の質疑応答
5	スライドの追加・修正	
5	代表によるプレゼン又は教師による講評	
3時限目：本番を想定して、相手に伝わるプレゼンの完成を目指す		
時間(分)	内容	備考
10	趣旨説明 一人1分で自己紹介 発表順を決定	クラスと名前だけだと一瞬で終わるので、+αのテーマを与えるのも効果的
30	学修インタビュー	2分～3分で発表+2分間の質疑応答
5	振り返り記入	
※一人一人の生徒が勇気をもって発表した内容に対して、 ポジティブ・フィードバック を心がけて、生徒の自己効力感や自己有用感を養い、ひいては自己肯定感を高めるような質問や助言ができればと考えます。生徒・保護者・教員にとって win-win-win となる学修インタビューを実現させましょう。私自身もこの取組の勉強をしたいので、うまくいったことやうまくいかなかったことも含めて、今回の成果をお聞かせください。		

図1 3時間の指導計画(教員向け)

1時間目は各自で準備を進めた。想定以上に準備に時間を要し、この日にリハーサルを行うことは難しかった。2時間目はクラス内でグループを作り、リハーサルを行った。3時間目はクラスを超えてグループを編成し、リハーサルを実施した。クラスを超えたグループ(例：国際科2名、英語系1名、理系1名、文系2名)内でのリハーサルは、全く違った進路を目指す生徒や初対面の生徒を前にしてプレゼンを行い、質疑応答を行うものであった。

3時間の準備を終えて、教員から以下のコメントが寄せられた。

- ・大半の生徒たちがしっかり調べ自分の言葉で語ることができていましたので、自らの進路について主体的に考える良い取組だと感じました。発表会は『発表2分』が適切でしたが、『Q & A』が長すぎて時間がもたなかったので、Q & Aを2分で作って最後に各グループから代表に再度プレゼンさせるという形をとりました。
- ・欠席、早退者が多く、学修インタビューの影響かと実施することに不安を抱えていましたが、7限が終わりHRに帰ってきた生徒の顔を見て、有意義な1時間だったということがわかりました。普通科に比べて、国際科の生徒の方が将来の「夢」をしっかりと持っていると感じました。普通科の生徒も良い刺激を受けたようなので、これからも機会があれば国際科・普通科の交流の場を設けてもらえればと思います。
- ・科を超えて発表し合えたのはすごく良かったと思います。やる意味はすごくあったと思います。質問で、「経営と経済と商業の中でどうして経営を選んだの？」のような質問の例を挙げておけば、質問タイムが充実したかも知れません。質問する側の知識がなく、うまくできなかつたと感想にありました。
- ・クラス編成や選択科目によって付き合う仲間が固定しがちだが、他クラスの生徒との出会いの場を設定し、交流させることは有意義なことである。様々な活動を通して、積極的に関わる姿勢を育てたい。
- ・発表が進むにつれ、ほとんどの生徒が2分位で話ができるようになっていました。一方で、質問を考えるのが難しかったようで、どうしても相手を思いやつの答えやすい質問になっているのが改善すべき点だったかと思います。担当した中で、一人だけ「どうしてこういうことをするのかわからない」的なことを書いて、その後、消して「良かったです」的なことを書いている生徒がいました。クラスを超えての趣旨をしっかりと伝えきれていなかったのかなとこちらも反省しました。

生徒には、3時間の活動を終えて振り返りシート(図2)を記入してもらった。振り返りシートによると、多くの生徒にとって、他の科/系の生徒のプレゼンを聞くことは新鮮であり、たくさんの新しい発見があったようだ。クラスを超えてこのような交流活動を行うのは初めてであったため、教員からは心配の声もあったが、終了後の生徒たちの充実した表情を見て安堵したようであった。

<p>学修インタビュー③ 振り返り 2年()組()番 名前()</p> <p>1. 2分間で自分の考えを聞き手に伝えることができましたか。 【 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 】 ※5 (高評価) ⇔ 1 (低評価) <理由></p>
<p>2. 上手な聞き手であることや質問を通して、積極的に参加することができましたか。 【 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 】 ※5 (高評価) ⇔ 1 (低評価) <理由></p>
<p>3. 保護者会での学修インタビューに向けて、どのような修正が必要ですか。</p>
<p>4. 全体を通しての意見・感想を書いてください。</p>

図2 振り返りシート

(3) 当日の進め方

- ①生徒がこれまでの高校生活で学んだことや努力したことを報告すると共に、将来の姿から逆算し、卒業後の進路希望を踏まえ、3年生で履修する選択科目や学習目標などについてプレゼンを行う。(5分)
 - ②三者で質疑応答を行う。(5分～10分)
 - ③担任が今後の学校生活について助言する。
- ※上記3項目を必須項目とし、残り時間は担任裁量とする。

(4) 実施までのスケジュール

時期	内容
7月	生徒及び保護者に学修インタビューの実施について説明
夏季休業中	オープンキャンパスについてのレポート課題
10月	学修インタビューの準備及びリハーサル(3時間)
11月	学修インタビューの実施(三者懇談会の一部として)

4. 学修インタビューの実施に係る教員アンケートの結果(回答人数12名)

表1 学修インタビューの成果(3つまで選択可)

番号	項目	人数
1	これまでの学修を振り返る機会になっていた。	0
2	3年生の選択科目についてよく考えていた。	4
3	行きたい大学や専門学校、就職先についてよく考えていた。	7
4	他の生徒の発表から刺激を受けていた。	5
5	親と進路について話すきっかけになっていた。	4
6	入試や就職試験に対する意識が高まっていた。	4
7	必要な検定・資格等について理解していた。	1
8	将来の生き方あり方を考えるきっかけになっていた。	6
9	将来就きたい職業について考えていた。	1
10	プレゼン能力が向上していた。	1

表1から教員の視点から見た成果をまとめてみたい。11月の三者懇談会の目標は、将来の進路を見据えたうえで3年生で履修する選択科目を決定させることである。その意味で、「番号3 行きたい大学や専門学校、就職先についてよく考えていた。」「番号2 3年生の選択科目についてよく考えていた。」が評価されたことは、学修インタビューを行っても、これまで通り三者懇談会での目標を外していないことがわかる。

また、「番号8 将来の生き方あり方を考えるきっかけになっていた。」からは、目先の進路を考えるだけでなく、自身の将来にも想いを馳せ、より大きな視点から進路を考える機会になっていたことがわかる。その他、保護者にも質疑応答に参加していただいたため、あらかじめ家庭内で進路に関する話し合いがもたれたケースが多かった。その結果、「番号5 親と進路について話すきっかけになっていた。」が評価されたのではないだろうか。

5. 学修インタビューの実施に係る生徒アンケートの結果(回答人数350名)

表2 生徒アンケート

※上段は人数、(下段)は割合

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	よくわからない	無回答
1	これまでの学修を振り返る機会になった	141 (40%)	170 (49%)	27 (8%)	6 (2%)	4 (1%)	2 (1%)
2	3年次の選択科目について考えた	249 (71%)	89 (25%)	7 (2%)	2 (1%)	2 (1%)	1 (0%)
3	行きたい大学や専門学校、就職先について考えた	217 (62%)	121 (35%)	5 (1%)	3 (1%)	2 (1%)	2 (1%)
4	他の生徒の発表から刺激を受けた	135 (38%)	152 (43%)	44 (12%)	11 (3%)	8 (2%)	0 (0%)
5	親と進路について話きっかけになった	151 (43%)	135 (39%)	45 (13%)	14 (4%)	4 (1%)	1 (0%)
6	入試や就職試験に対する意識が高まった	168 (48%)	145 (41%)	24 (7%)	6 (2%)	5 (1%)	2 (1%)
7	必要な検定 資格等について理解した	124 (35%)	167 (48%)	44 (13%)	8 (2%)	6 (1%)	1 (0%)
8	将来のあり方生き方を考えるきっかけになった	154 (44%)	144 (41%)	40 (11%)	7 (2%)	4 (1%)	1 (0%)
9	将来就きたい職業について考えた	177 (51%)	133 (38%)	30 (9%)	5 (1%)	5 (1%)	0 (0%)
10	プレゼン能力が向上した	62 (18%)	162 (46%)	83 (24%)	29 (8%)	14 (4%)	0 (0%)

表2以外の自由記述を紹介する。

- ・同級生に語ることで自分の夢に対して責任や自覚を持てた。
- ・海外の大学も考えて親と話せた。
- ・最初は親の前で自分の進路についてプレゼンをすることが嫌で仕方なかったのですが、終わってみると私がどれだけその大学へ行きたいのか伝わった気がして良かったです。
- ・親と今まであまり進路について話していなかったけど、これを機に大学のパンフレットを見たり、調べたりして、自分のやりたいことを親と共有できました。
- ・正直、初めは学修インタビューがとても嫌で、自分の志望大学や自分の将来の夢を先生や親のみならず、同じクラスや他クラスの人にまで話さなければいけないということに抵抗がありました。でも、いざやってみると元々人前で話すこと自体は好きなので、自分の将来に向き合う過程を通して、プレゼンの構成などもきちんと考えられ、達成感があって良かったです。
- ・この活動で進路について考える回数が圧倒的に増えました。良い活動でした！

生徒の感想を読み解くと、家庭で保護者と改まって進路について話し合うことは多くはないと思われる。このような公式の場が設定されることで、将来のあり方生き方に関する親子の対話が生まれている。また、家庭内だとい感情になってしまうかもしれないが、担任という第三者が同席しているために、生徒は落ち着いて自分の意見を述べ、保護者は子どもの気持ちを冷静に受け止めることができるのではないだろうか。

6. 学修インタビューの実施に係る保護者アンケートの結果 (回答人数112名)

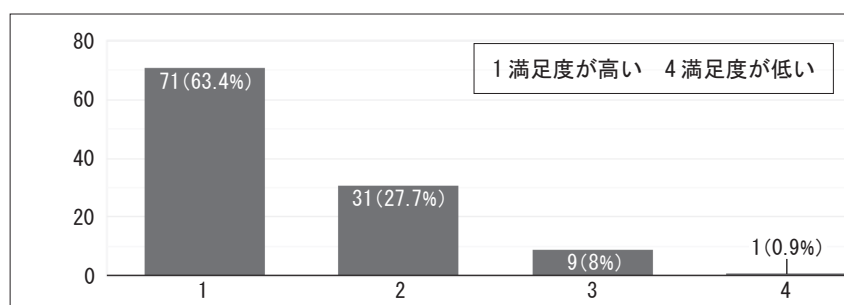


図3 保護者アンケート

図3以外の自由記述を紹介する。

- ・ 高校生ではなかなか自分の将来を真面目に考えることが難しい中、このような企画を頂き、子どもにとりましてとても良い機会になりました。本人の性格もあり、このテーマは家庭内ではなかなか話し合うことが難しいのですが、真摯に語り合うことができ、本人の考えを知ることができました。質問の機会を頂けたことで、本音も知ることができました。さらにインタビューを終えた後の懇談では先生のお人柄により、学校生活などいくつかの話題に関しまして、和やかに話をすることができ、とても有益でかつ楽しい時間を過ごすことができました。(略)
- ・ 各生徒が将来自分のどのような可能性を活かせるかを見据え、受験するならどのような準備が出来るか、早い段階から詳しく調べ、具体的にその目標に照準を合わせ、努力していくことが大変有意義であると思います。その具体目標を人前で発表することにより、より本人に自覚が出るでしょうし、周囲も協力し易くなると思います。
- ・ 家庭で進路について話をしているつもりでも、先生という情報をたくさん持つておられる冷静に判断できる第三者的な立場な人がいてくださる事により、分からない事を即知することもできるし、感情的にならずに話をできるのはとても有難い試みだと思います。ただ、やはり限られた時間の中なので、後から疑問なども出てくる事も多々かと。質問し易い環境をお願いします。

上記以外にもさまざまな肯定的な声が寄せられた。

保護者にとっても初めての取組であったため、もっと準備をして臨みたかったという意見もあった。このような取組が学校内で定着することにより、三者懇談会にかかわらず、普段からあり方生き方について話し合う機会が持たれることを期待したい。



図4 学修インタビューの様子

【神戸市立六甲アイランド高等学校での実践】

7. 背景と目的

将来に希望を持ち、夢にめがけて高校生活を意欲的に取り組むためには、高校生活の過ごし方や卒業後の進路について深く考える機会を持つことが大切である。加えて、身近な仲間や大人に将来について考えたことを発表する機会を持つことは、自分の思いを継続させる工夫に繋がると考えた。

そこで、葺合高等学校の取組を参考に、令和4年度の2年次生を対象に「夢プレゼン」という名称で学修インタビューに取り組んだ²⁾。

8. 取組内容

(1) 概要

10月下旬の三者懇談会をプレゼン本番と捉え、HR計4時間を準備の時間とした。概要を表3に示す。

表3 取組の概要

月日	時限	内容
9/2(金)	5限	概要説明
9/9(金)	6限	プレゼン作成
10/7(金)	5限	クラスリハーサル
	6限	年次リハーサル
10月下旬	—	三者懇談会(本番)

効果を上げるため、目的を生徒に伝える場を設けた。また、余裕を持って準備に取り組ませるため、作成・リハーサル・三者懇談会の間の期間を十分に設けた。

(2) 内容

① 9/2(金) 5限 概要説明

以下の内容を年次集会で周知した。

- ・これまでの自分を振り返るとともに、卒業後の進路を見据え、これからの学びを主体的・計画的に進めることを目的に、「夢プレゼン」を実施する。
- ・生徒が以下3項目を含むプレゼンを2、3分で行う。発表後、保護者及び担任からの質疑に答える。

【プレゼンに含める3項目】

- ・将来、何のためにどう社会で活躍・貢献したいか。
- ・どのような進路(分野・学部・コース等)を選択し、これから何を学ぶ必要があるか。
- ・必要となる入試・就職試験科目や3年次で履修すべき選択科目は何か。

2) 六甲アイランド高等学校は単位制を採用しているため、「学年」ではなく「年次」という言い方をしている。


② 9/9(金) 6限 プレゼン作成

HRの内容を表4に示す。記入例も兼ねて配付したパワーポイントフォーマットを図5-1から3に示す。なお、フォーマットの使用有無は生徒の判断に委ねた。

表4 9/9(金)HR

時間	内容
5分	担任による概要確認
5分	パワーポイントフォーマット配付
37分	プレゼン作成 → 個人リハーサル
3分	担任による講評・片付け

1. 将来、誰のためにどう社会で活躍・貢献したい？



飛行機パイロットになって

1. 乗客の旅先に向けた「思い」を応援

2. もともと空を飛ぶ乗り物が大好き


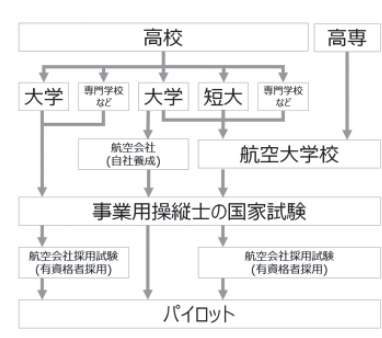
六甲アイランド高校24期2年次夢九ゼミ 

図5-1 パワーポイントフォーマット(1枚目)

2. 実現するために、どのような進路(分野・学部・コース)を選択し、何を学ぶ必要がある？



```

graph TD
    HS[高校] --> U1[大学]
    HS --> US[専門学校 など]
    HS --> U2[大学]
    HS --> SD[短大]
    HS --> US2[専門学校 など]
    HS --> HS2[高専]
    U1 --> AC[航空会社 (自社養成)]
    U1 --> AU[航空大学校]
    US --> AC
    U2 --> AC
    SD --> AC
    US2 --> AC
    HS2 --> AC
    AC --> NTE[事業用操縦士の国家試験]
    AU --> NTE
    NTE --> ACP1[航空会社採用試験 (有資格者採用)]
    NTE --> ACP2[航空会社採用試験 (有資格者採用)]
    ACP1 --> P[パイロット]
    ACP2 --> P
    
```

No	主な進路
1	工学部 航空宇宙学科
2	理工学部 航空操縦学専修
3	システムデザイン学部 航空宇宙システム工学科

学ぶ学問

物理学・数学・機械工学・電気工学・システム制御工学・航空工学 など…


六甲アイランド高校24期2年次夢九ゼミ 

図5-2 パワーポイントフォーマット(2枚目)³⁾

3) リクルート.“パイロットになるには”.スタディサプリ進路.<https://shingakunet.com/bunnya/w0009/x0116/>, (参照2022-09-09)

3.実現するために必要となる入試・入社試験科目及び3年次で履修すべき選択科目これです

入試科目

外国語：コミ英I・コミ英II・コミ英III・英表I・英表II
 数学：数I・数II・数A・数B ※数Bは数列・ベクトル。
 理科：物基・物、化基・化、生基・生 から1科目選択。

3年次で履修すべき選択科目

英語：英語文章構造探究
 数学：数学ⅡB探究
 物理：物理②・物理探究



図5-3 パワーポイントフォーマット(3枚目)

③10/7(金) 5・6限 クラス・年次リハーサル

クラスや年次リハーサルの内容を表5に示す。なお、リハーサルは聞く側が話しやすい雰囲気を大切にすること、良かったことに目を向けるポジティブフィードバックを心掛けることを伝えた。

表5 10/7(金)クラス・年次リハーサル

時間	内容
【5限】 3分	担任による概要確認
5分	グループ決め・机配置・発表順決め・質問順決め
35分	クラスリハーサル(6人程度のグループワーク)
7分	振り返り・6限の説明・片付け (代表によるプレゼン・担任による講評)
【6限】 5分	出欠・座席確認(担当教員による概要確認)
5分	1人30秒で自己紹介・発表順決め・質問順決め
35分	年次リハーサル(6人程度のグループワーク)
5分	振り返り

9. 結果(平均値は5点満点)

(1) 生徒対象アンケート

10/7(金) 6限年次リハーサル振り返り 回答262名

No	質問	平均値
1	2分間であなたの考えを聞き手に伝えることができましたか?	3.98
2	相手のプレゼンを積極的に聞いたり、質問することができましたか?	4.01

3	本日5・6限の経験を通して、三者懇談会ではどのように生かそうと思いますか？
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・将来やりたい仕事に就きたい理由や大学で学ぶ科目のことについてより具体的に言う。 ・三者懇談会では自分の進路に対する気持ちをしっかり伝えられるように練習したい。 ・書いてあることを話すだけでなく、話を広げたり、細かいところまで話したりして聞き手にきちんと伝わるようにしたいです。 ・どんな質問に対しても答えられるようにもう一度自分の進路についてしっかり考えたいです。
4	全体を通しての意見・感想を教えてください。
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な人の進路を聞いて、自分の進路の参考にもなったし、人に話すことで改善点が見つかった。 ・違う系の人の夢や志望校が、自分の系では絶対に聞かないようなものばかりでとても面白かったです。 ・なりたい職業がどういうものなのか、どうしてその職に就きたいのか、熱く語ってくれる人の発表はとても面白かったです。初めて知った職業もあり楽しめました。 ・クラスでは、自分の夢が決まっている人が多かったけど、年次リハでは、意外とみんながみんな夢があるわけじゃなくて、自分と同じように迷っている人もいることが知れて、少し気持ちが楽になった。

(2) 保護者対象アンケート

三者懇談会終了時 回答164名

No	質問	平均値												
1	夢プレゼンを実施してよかったと思いますか	4.11												
2	夢プレゼンの成果として、特に挙げられるものがあれば3つまで選んでください。													
回答	<table border="1"> <thead> <tr> <th>選択肢</th> <th>選択率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>行きたい大学・専門学校・就職先について考える機会になった</td> <td>36.7%</td> </tr> <tr> <td>将来の生き方を考える機会になった</td> <td>24.7%</td> </tr> <tr> <td>お子様と進路について話す機会になった</td> <td>20.0%</td> </tr> <tr> <td>入試や就職試験に対する意識を高める機会になった</td> <td>16.7%</td> </tr> <tr> <td>これまでの高校生活を振り返る機会になった</td> <td>0.01%</td> </tr> </tbody> </table>	選択肢	選択率	行きたい大学・専門学校・就職先について考える機会になった	36.7%	将来の生き方を考える機会になった	24.7%	お子様と進路について話す機会になった	20.0%	入試や就職試験に対する意識を高める機会になった	16.7%	これまでの高校生活を振り返る機会になった	0.01%	
	選択肢	選択率												
	行きたい大学・専門学校・就職先について考える機会になった	36.7%												
	将来の生き方を考える機会になった	24.7%												
	お子様と進路について話す機会になった	20.0%												
	入試や就職試験に対する意識を高める機会になった	16.7%												
これまでの高校生活を振り返る機会になった	0.01%													
3	夢プレゼンを実施しての感想を教えてください。													
回答	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの将来の夢を具体的に聞くことで、本人の夢への本気度が伝わり、親としても応援したいと思った。 ・子どもが自分で将来を考え、その思いを親、先生、友達に示すことで自分の考えを整理でき、親も応援する方向、機会を得ることができて良かった。 ・息子の意外な一面を見ることができて、とても良かったです。人前で発表するのは慣れていないと難しいと思いますが、言いたいことがちゃんとまとめてあり、映像もあって、とてもわかりやすかったです。 ・今回の夢プレゼンにより、将来やりたい事や、それに至る道のりを、こちらが思っていた以上に、本人なりに考えている事が分かって感心しました。夢について熱意を込めて話す様子を見る事ができたことも良かったです。 													

10. 考察

生徒対象アンケートの回答平均値は概ね4.0に達し、目的を達成することができた。保護者対象アンケートの回答平均値も4.1に達し、満足度も高かった。

本校は2年次から進路に応じた9つの系・コースに分かれる（現在は8つの系・コース）。異なる所属生徒の学習内容や進路選択に触れる機会が少ないが、本取組のリハールでは、系・コースの垣根を超えたグループ分けをしたことで、多様な進路に触れる機会にもなった。

保護者は、生徒の進路に対する考えや、学校での取組、また、端末の活用状況を知れたことが満足度の向上に繋がったと思われる。

教員からは、懇談を始めるきっかけを生徒のプレゼンに据えたことで、その後の話題を三者が共有したうえで進行できるようになり、円滑な運営に繋がったという意見が多数寄せられた。加えて、生徒が懸命に将来について調べ、熱く発表する姿に触れたことで、今まで以上に深く関わり、支援していきたいという、進路指導に対するより肯定的な意見も寄せられた。

11. まとめ

学修インタビューでは、生徒・保護者・担任(学校)のそれぞれにとって大きなメリットがあることが確認できた。

(1) 生徒

- ・自分に合った具体的な指導・助言を受けやすくなり、学習効果の向上が期待できる。
- ・自分の学習スタイルや強み、弱みを見つめ直す機会となり、自己理解が深まり自分に適した学習方法を見つけることができる。
- ・保護者や担任と具体的な目標を共有することで、それに向かって努力する道筋を確認できる。
- ・教員や仲間と対話や練習を重ねることで、自分の考えや意見を明確に伝えるスキルを高め、コミュニケーション力が向上する。
- ・自分の努力が認められ評価されることで、自己肯定感や学習意欲が高まる。また、保護者や担任から期待や励ましを受けることで、さらに学習に対する意欲が増し、積極的に取り組む姿勢が生まれる。

(2) 保護者

- ・子どもの学習状況や進捗を詳しく知ることができ、家庭での学習支援をより効果的に行える。
- ・子どもの成長や直面している課題について知ることができることにより、子どもの成長を実感し適切なサポートを提供する手がかりを得ることができる。

- ・子どもや担任とのコミュニケーションが深まる。また、担任からのフィードバックやアドバイスを直接受けることで、学校と連携して子どもの教育を支えることができる。
- ・子どもの教育に対する学校の取組を理解し、協力することで、保護者と学校が一体となって子どもの成長を支えることができる。

(3) 担任(学校)

- ・各生徒の学習状況、興味・関心、悩みなどを詳細に把握することができ、生徒一人一人に対するきめ細やかな指導が可能になる。
- ・生徒が抱える学習上の課題を知ることができることにより、早期に適切な対応を行うことができ、生徒の学習の遅れや挫折を防ぐことができる。
- ・生徒や保護者とのコミュニケーションが深まり、信頼関係を構築でき、生徒の教育に対する協力を得やすくなる。
- ・生徒への対応がきめ細かくなるため、学校全体の教育力を向上させることができることにより、学校への評価や信頼が高まる。

12. 今後の展望

令和の日本型学校教育では、「生徒を主語にする学校づくり」へと向かっている。学習指導要領の趣旨への理解が進み、授業のあり方が少しずつ変わってきている。一方、三者懇談会が変わってきているという声はあまり耳にしない。そもそも議論にもならない。私たちが本論を執筆したのは、三者懇談会のあり方を少し工夫するだけで、三者懇談会を生徒のキャリアを応援する作戦会議に変えることができることを伝えるためである。このような取組により、すべての関係者が前向きな気持ちになって、生徒の進路実現を支援することに繋がることを期待できる。

また、文部科学省からGIGAスクール構想が打ち出され、1人1台端末と高速大容量の通信ネットワークが整備された。本取組は、個別の調べ学習やスライド等を用いた資料作成を含んでおり、GIGAスクール構想で整備された端末等の積極的な利活用に繋がる。加えて、教員や保護者を含めた多様な年代との対話的な活動を含んでおり、進路学習の一層の充実とともに、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善にも大いに合致している。

一人でも多くの高校生が、自らのキャリアを主体的に開発し、夢と希望を描いて高等学校を卒業していくことを切に願うものである。

研究題目

夜間定時制工業高校における探究活動とものづくりの実践 ～生徒の自己肯定感育成と学校広報～

目 次

- 1 はじめに
- 2 学校の概要
- 3 研究の背景
 - (1) 過去の探究活動(乗れる遊具の製作を通して)
 - (2) 令和5年度課題研究のテーマ設定にあたって
- 4 指輪製作・販売会の具体的な取り組み(令和5年度)
 - (1) 作品製作
 - (2) 作品販売会と学校広報
 - (3) 販売会のまとめと今後について
- 5 おわりに

岡山県倉敷市立工業高等学校 教諭 佐藤 慎太郎

1 はじめに

次の社会がどのようなものかわからない、先行き不透明な時代において、生徒たちにおいては、何が起ころうとも正しく対応できる力が求められている。すなわち、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力である。このことから、新しい時代に求められる学びとして、問題解決学習であるPBL (Project-Based-Learning) が推奨されている。工業高校においては、まさに課題解決学習が主題となる「課題研究」が科目として設定されているが、私自身振り返ってみて、PBLの観点で効果的に課題研究を行うことができていたかという点、あまり自信がなかった。

そのような中で、PBLについてしっかりと学び、自らの指導に活かそうと思ったきっかけは、令和3年8月に、独立行政法人教職員支援機構が主催する「産業・情報技術等指導者養成研修」を受講したことである。PBLと、PBLの評価として有効なルーブリックに関する内容は、この研修の大きなテーマであった。それまではただ名前を聞いたことしかなかったPBLであったが、この研修を受講した後は、小さなことでも実践したいと考えるようになった。この年は、課題研究や総合的な探究の時間においてPBLを活かす場を持つことはできなかったが、私が当時担任をしていた機械科2年生のクラスで、文化祭への取り組みを考える場面からPBL活動をスタートした。

2 学校の概要

倉敷市立工業高等学校は、昭和24年4月11日に岡山県立倉敷工業高等学校内の昼間定時制課程として創立した学校である。このため、立地としては岡山県立倉敷工業高等学校と隣接している。昭和32年には夜間定時制となり、今年度で創立75周年となる。平成30年4月に玉野市立玉野備南高等学校の夜間総合技術科が募集停止となり、令和2年4月以降は岡山県下唯一の夜間定時制工業高校である。



図1 本校校舎

本校には機械科・電気科の2科が設置されており、それぞれに特色ある教育を行っている。「働きかつ学ぶ」の教育理念のもと、生徒たちは日中アルバイトに励み、仕事を終えて登校してくる生徒が多い。中学校時代に不登校の経験がある生徒や、特別な支援が必要な生徒が多く在籍しているが、高校からは学び直し、頑張ろうという意欲のある生徒も少なくない。本校におけるものづくり技術の指導は、そのような生徒たちに自信や自己肯定感のもととなる「成功体験」の機会を与え、社会で活躍できる技術者を育成することを目標としている。

3 研究の背景

(1) 過去の探究活動(乗れる遊具の製作を通して)

本校では例年、11月に市工祭(文化祭)が行われる。2学期が始まる9月から、文化祭に向けて展示内容などを各クラスで検討し、準備を行う。それまで私は、文化祭の企画内容を教員サイドから投げかけて取り組むことが多かったのだが、研修を受けたことで、文化祭の取り組みもPBL的な活動にしたいと考えた。PBLでは生徒の専心活動(生徒主体の探究活動)であることが重要であるため、生徒自身に企画内容を考えさせた。当時は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっており、暗い社会情勢であったことから、「子どもに喜ばれるような乗り物を作りたい」という意見が自然と生徒から出た。具体的な案にするために、生徒たちは他県



図2 2年生の文化祭で展示した作品

の高校における文化祭の取り組みの例なども調べ、遊園地にある遊具「ヴァイキング」を展示内容にすると意見を固めた。私はこの生徒たちの意見を最初に聞いたとき、製作期間がたった2か月しかないことや、予算が非常に限定されていることから、完成は難しいと考えた。しかし、折角生徒から出た前向きな意見である。目標達成が困難であるからといって、生徒の意見を折ってしまえば、今までと変わらないと考えなおし、結果はどうあれ、取り組ませることにした。

実際活動に取り掛かってみると、生徒たちは思いのほか積極的に動いた。特に費用の制約の問題に関して、地元の木材会社に自分たちで連絡を取り、ヴァイキング本体の主な材料である木材(端材)の提供を依頼したことについては、このようなことが本校の生徒たちにできるのかと、新たな一面を見ることができた。限られた時間の中、本体の骨組みを自分たちで組み、完成には至らなかったが、図2のように人が乗るヴァイキングの胴体部分のみを展示した。4人が乗っても底が抜けのないものではあったが、遊具と呼ぶには程遠いもので、彼らにとってはとても残念な結果であった。

この文化祭の次の年、彼らが3年生に進級して、「総合的な探究の時間」で引き続きヴァイキングの製作を行いたいという申し出があった。目標は「安全に乗ることができ、楽しめる遊具を作ること」であり、地域にある遊具製作の会社にも助言をいただきながら、取り組みを進めた。

その結果、完成したヴァイキングを図3に示す。図2の文化祭で展示したものと比較して、船の形にすることができた。船の前後に取り付けた縄を人力で引っ張ることで船を揺らす構造になっており、揺れ幅は前後の人が力を調節して、動かしたり止めたりする。支柱の足の部分に、本体が揺れても支柱が動かないように、地面に杭を打って固定するための治具を、溶接技術を活用して作成するなど、安全対策には特に気を配った。また、座席の下にアンプを内蔵しており、Wi-Fi接続により、音楽を流すこともできるようになった。



図3 完成したヴァイキング

当時はコロナ禍のため外部公開はなかなかできない状況であったが、不本意な展示となった2年生の文化祭から1年越しに文化祭で公開することができ、小さな妹・弟といった在校生の家族に楽しんでもらうことができた。このことは彼らにとって、自己肯定感の持てる取り組みにできたように感じた。

本校は夜間定時制工業高校であり、前述の通り日中も働いている生徒が多いため、学校の活動として外部の方と連携・協力する機会を持つことが難しい状況であった。しかし、この取り組みの中では、遊具会社や木材会社にご協力いただいたことや、文化祭を通して自分の活動を一般の方に知ってもらえたことなど、学校外とのつながりを意識する一つのきっかけにできたことが大きな成果になった。

(2) 令和5年度課題研究のテーマ設定にあたって

ヴァイキング製作の次年度、彼らは4年生に進級した。本校4年生では「課題研究」という探究活動を行う授業がある。(一般に、総合的な探究の時間の工業科における代替である)本校においては、3年生の総合的な探究の時間が週1時間(1単位)であったのに対し、この課題研究は週2時間(2単位)である。3年生に比べると活動できる時間が長いため、より高度な取り組みが可能である。3年生で取り組んだヴァイキング製作では、一部には工業・機械科としての技術を活かした部分もあったが、総合的な探究の時間のテーマとして、自由度広く考えて取り組んだ。しかし、4年生の課題研究は機械科の専門科目という位置づけであるため、より専門技術を活かした内容が求められる。

課題研究の授業の初日は、1年間どのような探究活動を行うか、探究テーマと担当教員を決定する。この時に、ヴァイキング製作の中心となった生徒(以後この生徒をA君とする)から、3年生までに培った旋盤の技術を活かして「指輪製作」をした

いという意思表示があった。彼にとって指輪は身近な装飾品であり、それを自分が学んだ技術を活かして作りたいとのことだった。この意見にA君の他2名の生徒が同調し、「旋盤を活用した指輪製作」をテーマとして、3名で活動を行うことになった。

4 指輪製作・販売会の具体的な取り組み(令和5年度)

(1) 作品製作

「指輪を旋盤で作る」という、テーマの柱については決まったが、逆に言えばそれ以外のことは全く何も決まっていなかった。そのため、まずはどのように作っていくのか、他に類似例がないか、情報収集から始まった。動画サイトなどを見ると、似たようなものが色々と紹介されており、大いに参考になった。また、本校の非常勤講師として、企業で長く材料切削に携わっておられた教員がおり、多くのアドバイスをいただいたことも活動の後押しとなった。

何かを製作する際、材料を選定することから始まる。機械科で最もよく用いる材料としては炭素鋼(SS材)、真鍮(黄銅)、アルミニウム合金などが考えられる。特に本校機械科の授業では、旋盤での切削材料として炭素鋼、真鍮を用いることが多い。炭素鋼は時間経過とともに腐食する可能性があり、磨いたときに非常に綺麗な光沢を放つ真鍮を使用する材料として彼らは設定した。また、動画サイトの中には機械科でよく用いる機械部品である「ナット」を使って指輪を製作しているものもあり、工場が無駄になっている、もしくはあまっているナットを材料に用いたものづくりを研究することで、SDGsの一つである「12 つくる責任・つかう責任」観点も取り入れたものづくりを目指して作ってみようという話になった。

方針が固まったことで、大きめの真鍮製ナットを用意し、まずは一般的な指輪サイズとして17号、18号くらいの大きさの指輪の製作を試みた。(17号で内径φ18.4mm、18号で内径φ18.7mm)内径切削は小さい穴も切削できる内径バイトを用い、ノギスで内径をこまめに測定しながら丁寧に削り出していった。(図4)ナットをしっかりと旋盤のチャックに挟むことができるので、内径切削はそれほど難しいことではない。(ただし、指輪の肉の部分が薄くなると、指輪が締め付け力で変形しないよう、チャックの締め付け力に注意が必要にはなるが)問題になるのは外径部の切削で、ナットの形のまま指輪にするのであればいいのだが、外径部は彼ら

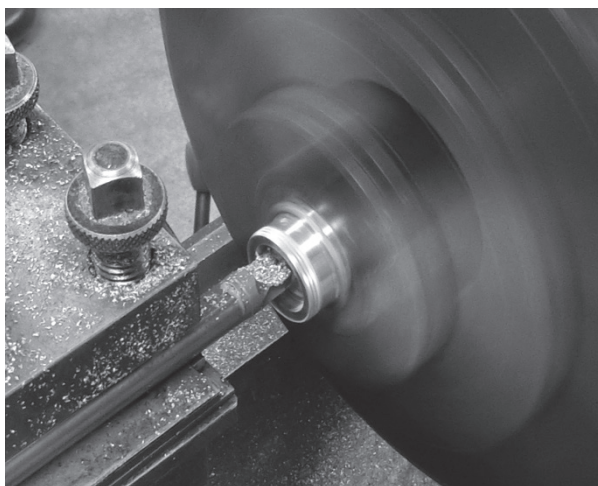


図4 指輪の穴部分(内径)切削の様子

としては最も工夫を施したい部分である。この部分はインターネット上にもあまり資料はなかったため、外径切削・加工を施すための治具を、オリジナルで製作した。(図5) この治具は炭素鋼で製作し、指輪の内径サイズに合った溝にナットをはめて、端部を抑えの部品で止めたものである。このような構造であることから、異なる指輪のサイズや幅ごとに治具を製作する必要がある、この作業もなかなか手間のかかるものになった。しかも、この治具がなければ外径加工が一切進まないことから、早急に製作することも必要であった。

外径加工の手順としては、ナットの六角形の形がなくなる程度まで外径用のバイトで繰返し切削を行い、その後面取りを行った。納得のいく外径の形ができたなら、サンドペーパー・やすりなどで、目の粗いものから細かいものまで順にきれいに磨いていった。その後、さらにピカール(研磨剤)で鏡面のようになるまで磨き上げる。

このようにして完成した作品を図6に示す。考えていたより綺麗な指輪を作ることができた。一方で、ナットから削り出して作る方法は、作ることでできる指輪のサイズに制限があるため、ナットから作るだけでなく、実習で用いた真鍮端材(丸棒)も活用して、できるだけ多くの指輪を製作することにした。

様々なサイズの指輪を多数製作することも簡単ではなかったが、もう一つ工夫した部分は、同じようなデザインのものばかりでなく、少しずつ形や模様を変えた指輪を製作したことである。例えば、図5に示した指輪は外が平たいような形

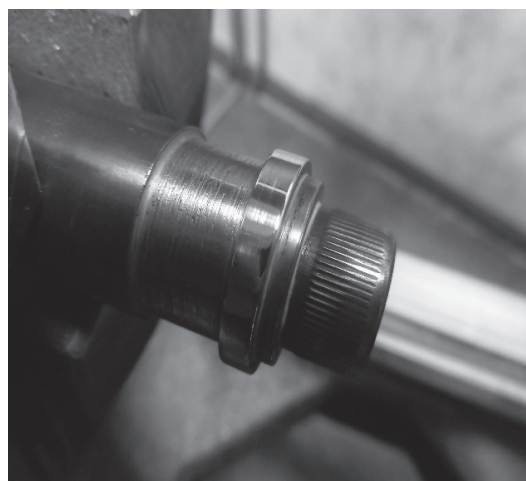


図5 外径加工に用いる治具



図6 完成した指輪



図7 様々なデザインの指輪

になっているが、図6の指輪は丸みを持たせたような形になっている。また、図7に示すように、ローレットと呼ばれるバイトを用いて網目状の模様をつけたもの、溝の入ったデザインのものも製作した。

(2) 作品販売会と学校広報

ある程度、指輪製作の方法や作業について見込みがたった頃、私はどのような形で彼らの製作した指輪を発表する場を設けるか考えていた。第一候補はヴァイキングと同様に文化祭で展示することであったが、コロナ禍以降、本校の文化祭は学校関係者(生徒の家族)に公開範囲を限定されていたこともあり、彼らの取り組みを広く校外の方々知ってもらえるような良い方法がないか思案していた。そのような中、10月頃のことであったが、A君から「自分たちの作った指輪を販売することができないか」という申し出があった。よくA君の話を聞くと、自分たちの作った作品にどれだけの価値があるのか知りたい、そのために販売活動をしてみたいとのことだった。私は学校で作った作品を販売する経験がなく、他の工業高校においてもそのようなケースはあまり聞いたことがなかった。(他校種、例えば商業や家庭科などの科が販売する取り組みについては聞いたことはあったが)たまたま私が参加した研修でそのような話題を出したところ、研修参加者の中で「販売することも問題ないのではないか」という話が出た。研修から帰校後、管理職の先生を通じて倉敷市教育委員会に確認を取ってもらい、問題ないことを確認できた。合わせて、倉敷駅前のえびす商店街の一角にあるワークスペースを持たれている方より、「教育活動に是非使ってください」という案内を頂いていたことを思い出し、連絡を取らせて頂いたところ、快くスペースをお借りすることができた。これはせっかくの機会ということで、指輪販売と同時に機械科の取り組みについて紹介することを考えていくところから、機械科のみでなく電気科と合同で専門科の取り組みについて紹介し、学校広報も兼ねたイベントにすることを考えた。イベントの開催日は、翌年1月下旬に設定した。

販売会というイベントを行う以上、ある程度の数の作品が必要である。また、販売するにあたっては価格設定も必要となる。イベントの概要が決定した11月末頃から作品の個数確保に向けて、生徒はより一層、指輪製作に勤しんだ。作品の価格設定については、作品の出来に応じて、400円から900円の間で、一つ一つ異なる価格を設定した。この価格帯の根拠は、材料代や作業にかかった時間を念頭に置いた上で、1,000円という桁になってしまうとお客さんから「高い」という評価を受けてしまうのではないかと、あくまで営利目的でなく、生徒たちが自己肯定感を持つきっかけのイベントにしたいという趣旨から、高い価格設定にできなかったことが大きな要因である。この価格帯が妥当かどうか、イベントの振り返りも含めてアンケートを作成し、お客さんに回答して頂くことも考えた。イベントにおける作品設置のレイアウトや、指輪以外の展示用作品の製作、指輪の製作工程を紹介する動画なども製作した。

イベントとすることで、指輪製作以外のことも考えなければならなかったが、このことも含めて生徒たちにとっては良い勉強になったと私は感じた。



図8 イベントの様子

図8は販売会当日の様子である。イベント自体は午後の3時間のみの短い時間ではあったが、午前中の会場準備の時点から、スペースの近くで店を出されている近隣の方や、通りがかりの一般の方なども覗いていただき、色々なお声をいただくことができた。指輪製作のテーマに取り組んだ生徒3名が当日も参加し、自分たちの作品の売り手として取り組んだ。特に印象的だったのは、生徒の活動や作品を紹介した後、指輪とその値段を見られた方から「このような価格設定では安すぎる。」との声をいただいたことだった。この声は生徒にとって、大きな自信につながったのではないかと感じた。

当日は56名の来場があり、来場された方には取り組みの趣旨を説明させていただいたうえで、アンケートをお願いした。これによると、年代は「60代以上」が、性別は「女性」が多いという結果であった。(図9) イベント当日は、私を含めて専門科の教員4名で対応したのだが、私たち教員サイドにとっても、地域の方と触れ合い、学校の広報を行うよい機会にすることができた。

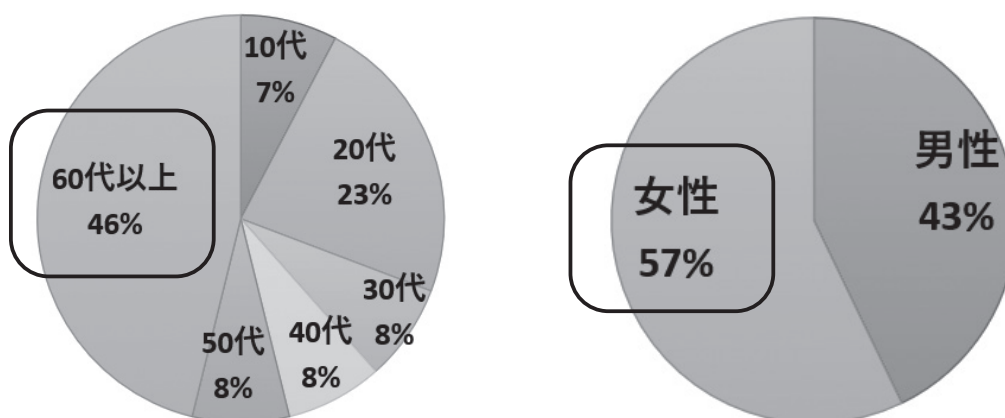


図9 イベントの来場者の年代・性別

今回このイベントをとおして私たちが痛感したのは、地域の方の本校に対する認知の低さである。アンケートの中で、「本校のことを知っている」と回答いただいたのは43%に留まり、残りの57%は「知らなかった」という結果であった。さらに、私が来場された方に「本校のことを知っていただいていますか？」とお聞きしたところ、「知っている」と言っていただけの方は多いのだが、よくお話を伺ってみると「岡山県立」倉敷工業高校のことだと思われており、夜間定時制の「倉敷市立」工業高校のことであると思われていない方が非常に多かった。つまり、アンケートの中で「知っている」と回答された中には、実は思い違いをされている方も一定数おられ、アンケートの数字よりも、さらに知っている方の数字は下がるということが分かった。

実際、本校は倉敷工業高校と隣接する学校であるため、普段から倉敷工業高校を訪ねるつもりで間違えて本校に来られる企業の方も一定数おられることもあり、今回のアンケートの結果も含めて、想像以上に本校の地域での認知度が低いことを再認識することになった。

(3) 販売会のまとめと今後について

生徒たちは当日までに19個の指輪を製作し、その中の14個の指輪を販売した。売り上げ金額は合計で9,750円であった。全ての指輪を売り上げることはできなかったが、自分たちが作った作品を実際に手に取ってもらい、お金を出して購入していただくことができ、生徒たちも満足そうにしていた。



図10 指輪製作・販売に取り組んだ生徒たち

イベントの後、今回の作品に関する価格設定や取り組みについてのアンケート項目について、まとめをおこなった。価格設定に関する質問項目には価格感度分析である「PSM分析」によるものを取り入れ、取り組みについては感想を自由記述の形で記

入をお願いした。PSM分析に関する具体的な質問項目と、それぞれの回答結果から横軸に価格、縦軸にその価格の回答割合をとり、グラフにプロットしたものが図11である。

指輪販売の取り組みに関する質問項目

- ①『あまりにも安すぎて品質に不安を感じ始める』価格はいくらか。
- ②『品質に不安はないが安いと感じる』価格はいくらか。
- ③『買う価値はあるが高いと感じ始める』価格はいくらか。
- ④『あまりにも高いので買う価値がないと感じる』価格はいくらか。

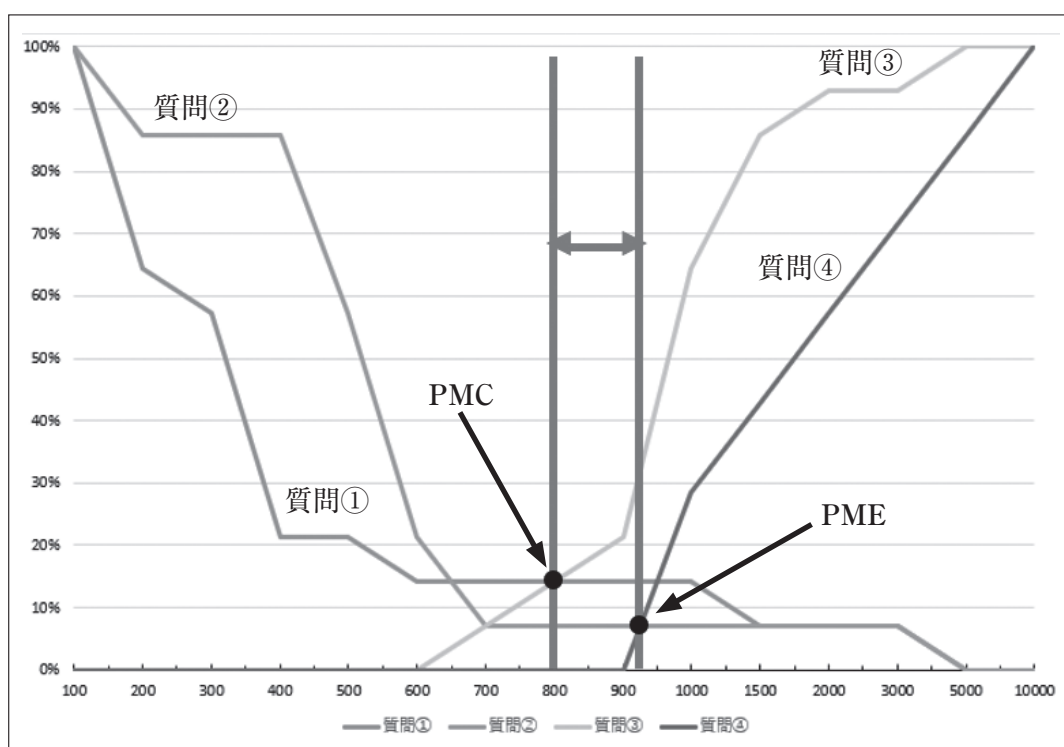


図11 PSM分析

このグラフの中で、質問①と質問③の直線の交点を最低許容価格 (PMC) という。PMCは、「これより安いと品質に不安を感じて買わないが増える」価格であり、価格設定の際にはこれよりも高い価格で設定することが望ましい。また、質問②と質問④の直線の交点は最高許容価格 (PME) といい、「これより高いと高すぎて買わないが増える」価格を指すものである。つまり、このPMCからPMEの間の価格帯が、適正な価格といえるものである。これによると、結果として800～930円が適正価格という結果になり、今回設定した価格はおおむね顧客の感覚から離れたものでないことがわかった。ただし、実際には800円未満で販売したものもあつたり、前述したとおり「さらに高い金額(1,000円以上)でも買う」と言っていた方もおられたりと、価格設定は難しい部分があることを改めて感じた。

また、取り組みについての感想の結果を以下に示す。

本取り組みの感想について(自由記述)

- ・頑張っていたと思います。(20代女性)
- ・良かった。(10代男性)
- ・指輪の工程が意外とたくさんあるのに驚いた。(20代女性)
- ・素敵な指輪でびっくりしました。(60代以上女性)
- ・学生さんが普段取り組んでいることを知る良いきっかけになり、
すごく良い機会だと思います。(50代男性)
- ・今回は指輪中心でしたが、色々な小物(ペーパーナイフ・文鎮など)見てみたい。
(60代以上男性)
- ・日本の将来を支える技術者が育っていくことを応援したいです。
先生方も生徒さんも10年20年先を見て、技術を育てようとしていることに
頭が下がりました。(60代以上女性)

自由記述形式の質問は、記入が面倒であるため、多くの回答が得られるとは考えていなかった。しかし、ここで紹介した回答に見られるように、生徒の取り組みが高く評価されたことは、彼らの努力が報われたように思えて、私自身もとても嬉しかった。

生徒たちはこれらのアンケート結果を踏まえ、販売会のまとめを行い、校内での課題研究発表会で発表を行った。自信をもって、堂々とした発表を行ってくれたことが印象的だった。2年生で始まったヴァイキング製作から4年生の指輪販売会まで、今まで本校では取り組みの例がなかった活動をしてくれた生徒たちは、無事に卒業していった。

さらに、今回のイベントについて、参加した教員の中でも振り返りを行った。主な意見としては、

- ・指輪に限らず、文鎮など日常生活に使える製品に購入希望があった。
- ・生徒が主体的に意欲的に取り組んだので、指導する側も楽しくサポートすることができた。
- ・あまり構えずに気楽に取り組みができたらよいのではないか。校内発表の延長で負担なく行えたらよいと感じた。
- ・簡単なワークショップ的な形と販売をコラボさせる。
- ・事前にビラ配りなどの宣伝をする。(商店街へのあいさつ回り)
- ・機械科・電気科合同の継続した取り組みにできたらよいと感じた。

などがあった。今回、PBLを継続して実践してきた生徒たちの活動を、教員サイドも良い形で支援できたし、今後も継続した取り組みにしていきたいという意見であった。

どの高校でも生徒数確保が課題となっている昨今、学校広報は全国共通の課題となっている。本県ではすでに夜間定時制工業高校は本校のみとなっている現状もあり、学校を今後も継続させていくためには、学校の活動を対外的にさらに発信していく必要があることを今回の取り組みでも強く感じた。令和6年度の現在、このアンケートの結果も踏まえ、ワークショップの開設、作品の販売、学校紹介を含めた第二回目のイベントを計画している。

5 おわりに

すでに述べたように、本校は岡山県で唯一の夜間定時制工業高校である。私は前任校より転勤して6年間勤めている中で、地域の中で本校が果たす役割は大きいと考えている。工業高校だからこそできることが多くあるであろうし、特色を生かして、全日制の高校生にも負けない取り組みができる。しかし一方で、地域における本校の認知度が低い現状があり、このことは生徒の自己肯定感を育てることに對して大きな弊害になっているのではないだろうか。生徒たち自身が「倉敷市立工業高校」の生徒であることを誇りに思えるようにしていかななくてはならないと強く感じている。そのようにしていくためには、生徒の自発的な活動や活躍の場を増やし、そのことを対外的なPRが重要なのだと、私が3年間関わった生徒から教えられたように思っている。生徒だけでなく、教員の私もこの経験を活かし、学校が、生徒が地域でさらに飛躍できるように支援していきたい。

研究助成にかかわる選考委員

- 阿 部 恵 次 (前(公財)東京海上日動教育振興基金 常務理事)
- 阿 部 聡 一 ((公財)東京海上日動教育振興基金 常務理事)
- 及 川 良 一 (元全国高等学校長協会 会長)
- 大 江 近 (元全日本中学校長会 会長)
- 小 栗 洋 (元全国高等学校長協会 会長)
- 亀 井 浩 明 (帝京大学名誉教授)
- 嶋 野 道 弘 (元文部科学省初等中等教育局視学官)
- 土 山 和 久 (大阪教育大学 教授)
- 宮 川 八 岐 (元文部科学省初等中等教育局視学官)
- 森 正 樹 (元(公社)日本教育会 専務理事)

五十音順 (10名)

公益財団法人 東京海上日動教育振興基金

〒104-0061 東京都中央区銀座5-3-16

日動火災・熊本県共同ビル

電話 03-5537-6375

FAX 03-3573-0177

(<http://www.tmn-kyoiku-sinko-f.org>)

